「永平寺町内小・中学校のこれからのあり方について」

答申（案）

●●は第５回委員会後の修正箇所

２０２１（令和３）年●月

永平寺町学校のあり方検討委員会

目　次

はじめに 1

１　永平寺町学校のあり方検討委員会の設置経緯 2
(1) 永平寺町の小・中学校の歩み 2
(2) 永平寺町の教育状況（資料７参照） 2
(3) 町村合併後の人口および児童生徒数の推移等の状況と今後の推計（資料６参照）... 2
(4) 諮問内容（資料１参照） 4

２　検討の経過 5
(1) 会議の経過と主な内容 5

３　アンケート調査の概要および分析 6
(1) 調査概要 6
(2) アンケート調査結果について（資料１０参照）..... 7

４　提言 10
(1) これからの教育の方向性について 10
(2) 望ましい教育環境のあり方について 14
(3) 地域と連携した学校づくりのあり方について..... 20

おわりに 23

資料編
資料１　　諮問書
資料２　　永平寺町学校のあり方検討委員会設置要綱
資料３　　検討委員会名簿
資料４　　永平寺町の教育大綱、振興計画
資料５　　これからの社会と教育のあり方について
資料６　　人口および児童生徒数の推移および令和 15 年度までの児童生徒数推計
資料７　　町内の学校教育の現状(全国学力・学習状況調査、福井県学力調査)
資料８　　永平寺町の学校のあり方に関するワーキンググループ（第１回委員会）の主な意見
資料９　　アンケート調査項目
資料１０　アンケート調査結果概要
資料１１　町民と共に進めるふるさと学習

はじめに

社会のあり方が劇的に変わる「Society5.0時代」、新型コロナウイルスの感染拡大等、「先行き不透明で予測困難な時代」が到来する中で、これからの学校のあり方をどのようにデザインするかということは、世界各国に共通する今日的な課題となっています。文部科学省は、中央教育審議会に対して、2020年代を通じて実現を目指す「令和の日本型学校教育」のあり方を諮問しました。それを受けて、中央教育審議会では、すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指すことが、重要なテーマとして議論され、答申としてまとめられました。

そのような時に、永平寺町では、永平寺町教育委員会教育長から「永平寺町学校のあり方検討委員会に対して、永平寺町内の小・中学校のこれからのあり方について、次の２つの諮問が出されました。

(1)　望ましい教育環境のあり方

(2)　地域と連携した学校づくりのあり方

このことは、まさに時流の先取りであり、永平寺町の未来の教育を考える意味で極めて重要な取組であります。

令和元年 12 月の第１回委員会開催以降、町民アンケートを実施し、計●回の審議を丁寧に進め、この度、答申を取りまとめることができました。関係の皆様方のご協力に対しまして、心から感謝申し上げます。

令和 3 年 12 月●日

永平寺町学校のあり方検討委員会

1　永平寺町学校のあり方検討委員会の設置経緯

(1) 永平寺町の小・中学校の歩み

現在、永平寺町では７つの小学校、および３つの中学校が設置されています。

小学校は明治５年の学制発布を受けて設立された小学校をルーツとし、以降、改称や統合分離を経て、明治 41 年の御陵尋常小学校設置により現在の７校の礎ができました。また、中学校は昭和 22 年の新学制により、当時の町村ごとに７つの中学校が設置され、昭和 25 年の志比中学校設置により現在の３校体制となりました（志比谷分校・浄法寺分校は昭和 26 年まで存続）。

それ以降、小・中学校 10 校が脈々と流れるそれぞれの伝統を数多くの先輩から受け継ぎ、義務教育の場としてふさわしい落ち着いた教育環境の中で今日を迎えています。

(2) 永平寺町の教育状況（資料７参照）

永平寺町における教育に関する取組の特色の１つは、複式学級の解消です。県の学級編成基準では、令和３年度現在、永平寺町内の２つの小学校で３つの複式学級が生じることとなりますが、町費で３人の講師を雇用することで複式学級化を解消しています。また、低学年や気がかりな児童生徒に寄り添い、学校生活を支援する学校教育支援員についても、約 30 人を雇用しています。

その他にも、各校の特色ある教育活動を支援する「特色ある学校づくり推進事業」、ふるさとを知り郷土愛を育むための「地域と進める体験推進事業」等の町独自の教育予算を確保することで、各校の教育活動を支援しています。保護者に対しても、平成 25 年度から学校給食の無償化を行っており、子育て世代を経済的に支援しています。

学力の面では、資料７にある通り、全国学力・学習状況調査の教科に関する調査では、全ての教科において、小・中学校ともに全国・県よりも正答率が高い結果となっており、永平寺町の児童生徒は、全国でも上位に位置していることがわかります。また、福井県学力調査の結果では、「学校生活は楽しいですか」の問いに対し、「まあまあ」も含め「楽しい」という回答が約９割となっており、概ね楽しい学校生活を送れています。

このように、永平寺町では、行政が独自の施策を継続的に行うことで学校を支援し、各校もそれに応える取組を継続的に行うことで、子どもたちが楽しく学校生活を過ごしながら学力も高水準を保つという、質の高い教育が進められてきました。将来にわたって、このような教育を維持し、発展させていくことが望まれます。

(3) 町村合併後の人口および児童生徒数の推移等の状況と今後の推計（資料６参照）

■町村合併後の人口および児童生徒数の推移等の状況（各年４月１日）

	H18	H23	H28	R3
町人口	20,377	19,884	19,080	18,241
対 H18 比		0.98	0.94	0.90
小学校児童数	1,204	1,116	1,045	905
対 H18 比		0.93	0.87	0.75
中学校生徒数	629	578	553	488
対 H18 比		0.92	0.88	0.78

表のように、人口と児童生徒数が減少し続けていますが、人口の対 H18 年比がこの 15 年で 0.90 なのに対し、小学校児童は 0.75、中学校生徒は 0.78 となっており、少子化の波が永平寺町でも顕著に見られます。

■児童生徒数の今後の推計（R 元年当時の推計、各年 4 月 1 日）

【推計方法】

H27 から H31 の 5 年間の出生率および年齢による増減率が今後も継続するという条件で児童生徒数を算出しています。したがって、情勢の変化によっては、推計値と実数が大きく異なる場合があります。また、学区を越えた通学、特別支援学校や義務教育学校等への通学により、実数との差が生じることもあります。

	H31 推計	（R3 実数）	R5 推計	R10 推計	R15 推計
松岡小学校	369	381	360	401	382
対 H31 比			0.98	1.09	1.04
吉野小学校	94	63	63	53	54
対 H31 比			0.67	0.56	0.57
御陵小学校	112	110	102	89	86
対 H31 比			0.91	0.79	0.77
志比小学校	146	118	103	75	58
対 H31 比			0.71	0.51	0.40
志比南小学校	87	75	74	36	30
対 H31 比			0.85	0.41	0.34
志比北小学校	33	34	30	17	12
対 H31 比			0.91	0.52	0.36
上志比小学校	122	124	108	87	75
対 H31 比			0.89	0.71	0.61
小学校児童数	963	905	840	758	697
対 H31 比			0.87	0.79	0.72
松岡中学校	304	297	299	264	277
対 H31 比			0.98	0.87	0.91
永平寺中学校	155	134	148	93	59
対 H31 比			0.95	0.60	0.38
上志比中学校	68	57	64	48	41
対 H31 比			0.94	0.71	0.60
中学校生徒数	527	488	511	405	377
対 H31 比			0.97	0.77	0.72

松岡小学校のみ、若干増加する推計結果ですが、それ以外の学校は減少傾向となっています。平成 31 年度と令和 15 年度を比べると、町全体で小・中学校ともに約 3 割の減で、特に永平寺地区での減少が著しく、約 6 割の減少が見込まれています。

(4) 諮問内容（資料１参照）

上記にもありますように、今後も児童生徒の減少は進行していきます。また、「GIGA スクール構想」や「Society5.0」、人口減少や高齢化による地域コミュニティ維持の問題等、教育を取り巻く社会情勢の変化は、永平寺町の教育にも様々な影響を及ぼすことが懸念されます。

永平寺町教育委員会は、町内の小・中学校において将来にわたって質の高い教育を維持するため、児童生徒にとってどのような教育環境が必要かを教育的見地から総合的に議論し、望ましい学校のあり方についての答申を求めるため、有識者や PTA、地域住民等から構成される検討委員会を設置し、以下の内容について諮問することとしました。

＜諮問事項＞

(1)望ましい教育環境のあり方

(2)地域と連携した学校づくりのあり方

＜諮問理由＞

少子化の進行を含めた社会情勢の変化は、教育環境に様々な影響を及ぼすことが懸念されます。永平寺町の小・中学校において、将来にわたって質の高い教育を維持するため、児童生徒にとってどのような教育環境が必要なのかということを総合的に議論し、望ましい学校のあり方について答申をいただきたい。

2 検討の経過

(1) 会議の経過と主な内容

上記の諮問を行うため、永平寺町は令和元年 12 月 25 日に「永平寺町学校のあり方検討委員会」（資料２参照）を設置し、同日、第１回検討委員会が行われました。当初の予定では、令和３年２月までに６回の委員会を開催し、令和３年３月に答申を行うことになっておりましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による延期や議案精査のための追加開催もあり、最終的には令和●年●月までに●回の委員会を開催し、令和●年●月に答申を行うこととなりました。各回の開催日や内容は以下の通りです。

回数	開催日･会場	内容
1	R1.12.25 永平寺開発センター　消防ホール	委嘱状交付、委員長互選、副委員長指名、諮問書交付 協議事項 (1)委員会の目的について (2)諮問事項について (3)これからの社会と教育のあり方について (4)教育の目的について（法律の規定） (5)永平寺町の教育指針について (6)スケジュールおよび協議内容（予定）について
2	R2.9.25 上志比文化会館　サンサンホール	協議事項 (1)第１回委員会グループワークでのご意見について (2)永平寺町内の学校教育の現状について（全国学力・学習状況調査および福井県学力調査の結果） (3)児童生徒数の変遷および推計について (4)アンケート（案）について
3	R2.12.23 上志比文化会館　サンサンホール	協議事項 (1)アンケート（案）について
4	R3.6.25 永平寺開発センター　大ホール	協議事項 (1)アンケート結果の報告について (2)委員長、副委員長の所見 (3)質疑応答および意見交換
	R3.1	アンケート実施
5	R3.9.27 永平寺開発センター　大ホール	協議事項 (1)答申（案）について (2)質疑応答および意見交換
6	R3.11.26 永平寺開発センター　大ホール	協議事項 (1)答申（案）について (2)質疑応答および意見交換
7	●●	●●
	●● 教育長室	教育長に答申書提出

３ アンケート調査の概要および分析

答申の作成に向けて実施したアンケート調査は、5,070 人を対象に実施し、3,810 人から回答をいただきました。これは永平寺町の人口の約 20%に当たります。

また、回答いただいた調査票には、たくさんの意見が記入されており、このようにしてはどうかというご提案もたくさんいただけました。

地域の方、小学生、中学生、教職員のみならず、幼児園や幼稚園に通う子どもの保護者のように、これから学校に関わる方々や、小・中学校を卒業した高校生たちからもたくさんの回答をいただくことができ、永平寺町の学校のあり方や教育に対する町民の関心の高さが伺えました。

(1) 調査概要

①調査時期

令和 3 年 1 月

②調査対象

永平寺町の小・中学校に通う児童生徒の保護者 1,100 人
永平寺町の幼児園・幼稚園に通う児童の保護者 470 人
永平寺町の小学校に通う小学 2～4 年生 471 人
永平寺町の学校に通う小学 5～6 年生、中学 1～3 年生 828 人
永平寺町内の高校生 565 人
永平寺町在住の方から無作為で抽出した 1,500 人
永平寺町の小学校教員 85 人
永平寺町の中学校教員 51 人

③調査内容

資料 9 の通り

④回答状況

	調査対象者数 （配布数）	有効回収数 -無効票数（白票等）-	有効回収率
保護者（小中学生）	1,100	1,062 -4-	96.5%
保護者（幼児園・幼稚園）	470	397 -0-	84.5%
小学２～４年生	471	469 -0-	99.2%
小中学生	828	809 -0-	97.7%
高校生	565	254 -0-	45.0%
地域住民	1,500	685 -1-	45.7%
小学校教員	85	84 -1-	98.8%
中学校教員	51	50 -1-	98.0%
合計	5,070	3,810 -7-	75.1% （返送数 75.3%）

(2) アンケート調査結果について（資料１０参照）※令和３年１月時点の町の現状

①教育環境について

全体的に子どもたちの学びたいという強い意欲がみられました。特にプログラミング教育やグループ学習について、ぜひやってみたいと考える子どもが多くなっています。その半面、ICT 教育の環境を十分に整備できていると回答する教員は少なく、子どもたちの学びたいというニーズに十分に応えられていないということがわかりました。

なお、アンケート調査時点では、全児童生徒分のタブレット端末が整備されていない状況でしたが、令和３年 10 月時点ではタブレット端末の整備が完了し、授業での活用についても学校の枠を超えた研究が進められています。

②地域と学校の関わりについて

小学校と地域の関わりについて、子どもたちの登下校の安全のサポートを地域に期待する保護者・教員が多く見られました。登下校の安全をサポートできると回答する地域住民も多く、保護者・教員のニーズと一致しています。また、小学校教員の多くは、地域住民に対し、地域の歴史や文化、自然体験の学習支援を期待していますが、このニーズに応えられる地域住民は少なく、小学校のニーズと地域住民をつなぐ支援が必要であることがわかりました。

中学校と地域の関わりについては、職場や就業に関わる体験活動の支援を地域に期待する保護者・教員が多い一方、これを支援できると回答する地域住民は少なく、これについても保護者・教員のニーズと地域住民をつなぐ支援が必要です。

③学校同士の関わりについて

他校との交流に対する保護者の満足度が低く、教員の調査でも他校との交流が十分できていないとの回答が多い結果となりました。教員・保護者ともに、町全体での交流が課題だと考えており、積極的に対応していくことが重要です。

④学級・学年の望ましい環境について

小学校教員の多くは､1学級について最低10人は必要で､20人前後が望ましいと回答しています。1学年については、20～30人が望ましいという回答が多く、また1学年の上限について、60人まで回答が広がっていることから､2～3の学級から構成される学年を望ましいと考えている小学校教員が多いということが伺えます。

また、中学校教員の多くは、1学級について最低20人は必要で、20人前後～30人が望ましいと回答しています。1学年については、40～49人が望ましいという回答が多く、1学年の上限について、110人まで回答が広がっていることから、3～4の学級から構成される学年が望ましいと考えている中学校教員が多いということが伺えます。

⑤通っていた小学校、中学校の児童数・生徒数について（高校生調査）

どの中学校区においても、自分が通っていた小学校や中学校の1学級あたりの児童数・生徒数がちょうどよかったと考える高校生が多くみられました。しかし、上志比中学校区の高校生は、児童数・生徒数がもっと多い方がよかったという回答が他の中学校区よりも高く、小学校に関しては、児童数がもっと少ない方がよかったという回答は見られませんでした。

⑥通っている小学校、中学校の児童数・生徒数について（小・中学生調査）

どの小学校・中学校においても、自分が通っている小学校や中学校の1学級当たりの児童数・生徒数がちょうど良いと考える児童生徒が多くみられました。しかし、御陵小学校、志比小学校、志比南小学校、上志比中学校に通っている児童生徒は、児童数・生徒数がもっと多い方が良いという回答が他の学校よりも高くなっています。

⑦小・中学校の統廃合について

全体の結果としては、小学校・中学校の統廃合を仕方ないと考える人が多いという結果になっていますが、地区や調査ごとに分析すると、小学校・中学校の統廃合を仕方ないと考える人や存続を希望する人の割合に地域差がみられます。

小中学生保護者、幼児園・幼稚園保護者、地域住民、小学校教員、中学校教員のすべての調査において、ある程度の適正人数を確保するために小学校・中学校の統廃合を仕方ないと考える人が半数を超えています。特に幼児園・幼稚園保護者の調査において、小学校・中学校の統廃合は仕方ないという回答が多くなっています。

小学校区別にみると、吉野小学校区、上志比小学校区では、ほとんどの調査において小学校の存続を希望する人が多い傾向が、また、吉野小学校区、志比北小学校区では、中学校の存続を希望する人が多い傾向がみられます。これらの小学校区では、学校の統廃合を仕方ないと考える人の割合が概ね低く、学校の統廃合を仕方ないと考える人と存続を希望する人の割合の差が小さくなっています。特に、現在吉野小学校や志比北小学校に通う児童の保護者は、小学校・中学校の存続を希望する人が最も多くなっています。

(3)アンケート調査の公開について

アンケート調査票及びアンケート調査結果については、町ホームページ上にて公開しております。また、記述回答については、データが膨大な量となったため、令和3年6月28日（月）～7月9日（金）まで、永平寺町役場学校教育課にて閲覧に供しました。

4 提言

(1) これからの教育の方向性について

①Society 5.0 とブーカの時代に個人・地域・世界・地球のウェルビーイングを目指す

今、社会のあり方が急変しています。これまでの社会は「産業社会」と呼ばれ、モノの生産と流通を加速・拡大することによって経済利益を生み出し続け、その経済利益を原資として人々の生活に利潤と幸福をもたらしてきました。この産業社会では、モノを効率よく生産・流通する能力、そのために決められた手順を忠実に遂行する能力といった、労働の効率性に必要な力が人々に求められてきました。

しかし、私たちが暮らす社会は「知識社会」へと移行してきています。知識社会では、知識や情報や対人サービスの提供、そして新しい知識の創造が大きな経済利益を生み出します。そして、知識や情報を交換するために人々の移動と交流が増加し、グローバル規模の経済圏と文化圏が拡大していきます。知識を基盤とした新しい経済は、産業社会よりも多くの人々に利潤と幸福をもたらしつつあります。しかし、知識と情報の発展により技術はより複雑化し、グローバル化の拡大によって経済の国際競争も激化するのが知識社会です。

知識社会は Society 5.0 とも呼ばれます。Society 5.0 では、人工知能（AI）やロボティクスといった科学の先端技術がめざましく進歩し、あらゆるモノにインターネットが接続して人々の生活をサポートし、さらには AI、ロボット、インターネットの技術によって人の能力までもが拡張していきます。また、人は多くの情報、すなわちビッグデータにアクセスすることが可能になり、そのビッグデータが私たちのモノやコトへの嗜好や関心の傾向を読み取り、適切な情報や問題の解決方法を導き出してくれます。Society 5.0 の中で、私たちの生活はより良く改善され、その結果、私たちは多くの時間を創造的な仕事や余暇に費やすことができるようになります。

しかし、私たちの生活が便利になるのと同時に、世界はより不安定で移り変わりやすく、不確実で信頼あるものを見定めることが難しく、科学技術や人間関係がより複雑になっています。そのような状況で私たちは適切な判断を行わなければなりません。この世界は、「不安定（Volatility)」「不確実（Uncertainty)」「複雑（Complex)」「曖昧（Ambiguity)」それぞれの英語の頭文字をとって「ブーカの世界（VUCA World)」と呼ばれています。そして、このブーカの世界は「危機と隣り合わせの世界」と捉えることもできます。例えば、地球規模の気候変動によって日本国内でも想定外の災害が増加し、新型コロナウイルス感染症パンデミックによって私たちの暮らしと生活が制限されています。また他国では、政情不安による暴動増加や民主主義の崩壊といった「危機」が起こっているのを私たちは目の当たりにしています。こうした「危機」がいつどこで私たちに迫ってくるのかわからないため、可能な限りその危機を回避し、危機が起きたとしても柔軟に対応して解決するための能力を私たち一人ひとりが身につける必要があります。

また、このブーカの世界で私たちは、個人の生活の質をより良い状態に保ちながら、地域が抱える問題に常に開かれ、地域の人々とともに協力してその問題解決にあたることが必要になります。そして、個人や地域のためだけでなく、世界そして地球規模の問題や課題に目を向け、その問題や課題の解決のために行動することが求められます。すなわち、個人・地域・世界・地球のより良い状態＝ウェルビーイングの実現を目指して、一人ひとりが責任をもって、互いに助け合い、力を合わせて行動することが必要なのです。

経済協力開発機構（OECD）では現在、Education 2030 プロジェクトとして、これからの社会で私たちに求められる能力の研究を進めています。このプロジェクトでは、人が社会に積極的にかかわ

り、他者や環境をより良い方向へと前進させたり励ましたりする能力を「エージェンシー」という言葉で表現しています。そして、このエージェンシーを中核にして、新しい価値を創造する力・責任ある行動をとる力・対立やジレンマに対処する力といった大きな能力を育み、個人・地域・世界・地球のウェルビーイングを人々が協力して実現していくことを提唱しています。

②主体的な学び、対話的な学び、深い学び

Society 5.0 とブーカの世界が進行する中で、世界各地で子どもたちに個人・地域・世界・地球のウェルビーイングを実現可能にするための高次の能力を育む「21 世紀型教育」が推進されています。この世界的な動きと連動して、日本でも「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の実現が学校教育に求められるようになりました。

この要請に対して、日本の学校と教師たちは、産業社会で支配的だった知識伝達型の教え方から脱却し、子どもたちが主体となる学びをデザインし、ペアやグループで学び合う協働学習を授業に積極的に組み込み、子どもたちが学ぶ環境を学校と教室から地域、そして世界へと広げ、実社会で起こっている問題を子どもたちとともに探究し、さらにデジタル教科書やタブレット端末を適切に活用して、子どもたちの個性や能力に応じた支援を行なっています。こうした学びの中で、子どもたちは、社会生活の基盤となる基礎的な読み書き・計算能力や人と関わる社会的な能力を育みながら、健康な生活を送るための身体的なスキルを向上させ、芸術的なスキルと見識を育み、複雑な概念や理論を深く理解していくのです。

これらの学びの変化に対応して、子どもたちの学びの実態を把握するために毎年実施されている全国学力・学習状況調査の内容も変化しています。これまでは、学校で学ぶ内容（モノやコト）としての「知識」を問う問題形式で子どもたちの学力を把握してきましたが、2019 年からは「知識」と「活用」を一体的に問う問題形式に変更されているのです。

また、高校入試・大学入試でも、子どもたちの「知識」だけでなく「能力」を問う新しい形式への挑戦が始まっています。例えば、近年の高校入試では、あるトピック（話題）に対する自分の「考え」を問う問題や「判断」を表現する問題が増加傾向にあります。大学入試も同様で、さらに高校生までの学びのあゆみ、特に地域での学びや国際的な活動を通した探究のあゆみを評価する推薦入試や AO 入試が国公私立すべての大学に広まっています。

このように、子どもたちの学びとそれを評価する方法も「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて変化しています。そしてもちろん、「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」への挑戦は、永平寺町の学校と教室の至るところで見ることができます。しかし、この挑戦は全国的にもまだ端緒についたばかりですので、これからさらに「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた研究と研鑽が学校と教師たちに求められます。

主体的な学びとは、子どもたちが「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」という意欲をもって学びに自ら取り組み、学ぶ内容と学ぶことそのものを好きで好きでたまらない状態になることを言います。そして、人は主体的に学び始めると、その学びに必要な知識やスキルを自ら向上させるようになり、学ぶ内容への見識を深め、学び方もより良く改善することになります。

対話的な学びとは、人が他者と協力して対話する中で学び合う「仲間づくり」だけではありません。人が学ぶ内容と出会い対話することで世界の成り立ちを理解していく「世界づくり」、そして仲間との対話や世界との対話を通して自分自身と出会い対話する「自分づくり」を含む、３つの対話を実現することが対話的な学びです。

そして深い学びとは、学ぶ内容を単に暗記してテストで素早く再現することではありません。学ぶ内容を互いに関連づけながら整理し、それを知識として複雑な問題状況の解決に活かすこと、新しい価値の創造に活かすことが深い学びです。そして、知識を活用するために考える力、人とかかわる力、行動する力、探究し続け学び続ける力といった多様な能力を発揮し育むことが深い学びの本質なのです。

また、「社会に開かれた教育課程」とは、学校における子どもたちの学びを社会へと理念的に結びつけていくことではありません。学習環境を学校・教室から地域・世界へと広げ、子どもたちが実社会に参画しながら、個人・地域・世界・地球のウェルビーイングの実現に向けたエージェンシーをはじめとした能力を育むことのできる教育課程をデザインすることが「社会に開かれた教育課程」です。

したがって、永平寺町のすべての子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の中で、Society 5.0 とブーカの世界で求められる能力を伸ばしていくためには、そして個人・地域・世界・地球のウェルビーイングの実現を見すえて行動していくためには、永平寺町の学校と地域、そして家庭が今よりもっと協力し、豊かな学びの機会を子どもたちに提供することが期待されるのです。

③生涯にわたって子どもたちと大人たちが学び続ける学校・地域・家庭

永平寺町のすべての子どもたちに豊かな学びの機会を提供するためには、学校が地域と家庭をつなぐ「ハブ」の役割をこれまで以上に担う必要があります。

学校では、教育の専門家である教師たちを核にして、すべての教職員で子どもたちの学びと育ちに効果の見られるこれまでの教育方法や授業モデルを確認しつつ、そこに新しい教育方法や授業モデルを組み込む挑戦に取り組むことが期待されます。特に、子どもたちの学びの経験が学校や教室の中だけで閉じないよう、教師たちは地域内外に点在する学びの機会を紡ぎ、子どもたちを地域や世界とつなぎ、多様な他者との出会いと対話を通した子どもたちの世界づくりを支える必要があります。

こうした挑戦を学校で推進するには、教師たちが管理職と学校職員と互いに助け合い、学び合うことのできる学校文化と、永平寺町内外の学校間ネットワークを編み込む必要があります。学校も教師も、単独では大きな力を発揮することはできず、新しい挑戦を長く続けることもできません。永平寺町の学校が互いに手を携えることで、例えば教師たちが新しい教育方法や授業モデルを協働開発する、授業研究をはじめとした校内研修を開き合うといった、新しい形の協働の取り組みが、より一層期待されます。そして、永平寺町外の学校や教育機関ともネットワークを結び、「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」への挑戦を吟味し合い、知恵を共有し、新しい教育方法やカリキュラムを創造していくのです。

また、教師たちの生涯にわたる力量形成を支えるために、多様な研修機会を保障する必要があります。OECD の 2018 年国際教員指導環境調査では、日本の教師の 1 週間当たりの勤務時間は小学校で 54.4 時間、中学校で 56.0 時間と同調査参加国・地域の中で最長で、一方で職能開発にかける時間は小学校で 0.7 時間、中学校で 0.6 時間と同調査参加国・地域の中で最短という結果でした。こうした教師の職務状況を踏まえた上で、永平寺町は福井県並びに県内の高等教育機関と連携しながら、教師たちが新しい教育方法や授業モデルに協働で挑戦するための研鑽を積み、学校内外の学びの機会をつなぎ、それを可能にするシステムを構築する必要があります。特に、永平寺町の学校それぞれの組織力の向上、さらには教師一人ひとりの力量形成を支えるためには、教師教育の専門的

知見と資源（リソース）を豊かに有する大学等との協働連携が不可欠になるでしょう。

これらの学校と教師たちの挑戦を支えるためには、地域と家庭の厚い協力と信頼が不可欠になります。

「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」を実現するには、学校と地域で連携した探究型やプロジェクト型の授業モデルによる学習デザインが必要になります。地域の歴史、伝統と文化、産業、そして人々が、子どもたちの学びにとっての最高で最大の資源になります。地域を形づくるモノやコトを学び探究することで、子どもたちはふるさとへの愛情を育みながら、地域が抱える課題や問題、あるいは地域が誇る魅力に気づき、その課題や問題を地域とともに解決したり、魅力を最大化するためのアイデアを生み出したりします。こうした一連の学びと探究の過程で、子どもたちはエージェンシーをはじめとした多様な能力を育んでいくのです。子どもたちの学びに対する地域の力は絶大です。そして、子どもたちの力は地域の課題解決や活性化をもたらしてくれます。学校と地域のパートナーシップは子どもたちの学びと大人たちの生活にプラスの相乗効果をもたらすのです。

家庭は、子どもたちが学校よりも長く時間を過ごす場であり、そこで保護者は子どもたちの学びと育ちの最たる当事者です。そして保護者は同時に、学校と教師たちの最高のパートナーであり、地域の大人の一員でもあります。子どもたちが未来社会の担い手として健やかに育っていくために、教師たちは日々、子どもたちの思いや気持ちに心を砕き、新しい教育方法や授業モデルの研鑽を熱心に続け、子どもたちに豊かな学びを提供しています。こうした教師たちの熱誠あふれる挑戦を、保護者は子どもたちの学びと育ちの当事者としてサポートしながら、最高のパートナーとして教師たちを信頼し、子どもたちの学びと教師たちの教えに必要なサポートを提供していく必要があります。

例えば、学校と家庭の連携は子どもたちに安心と居場所感を与えてくれます。子どもたちは安心と居場所感を覚えることで、学びに夢中になり、未知で難しい課題にも挑戦することができるようになります。また、保護者の学習参加は教師たちの挑戦を支えながら、子どもたちの学びを大きく広げてくれます。先に述べたように、子どもたちは多様な他者との出会いと対話を通して学びを深め、世界の成り立ちへの理解を深め、自己を確立し、能力を向上させていくものです。保護者が学びの場にいることで、子どもたちは教師以外の大人、それも多様な世代の大人から学ぶ機会を得て、世界を広げ、深く考える力やコミュニケーション能力を向上させることができます。そして同時に、保護者もまた子どもたちの考えや学ぶ姿から世界を広げることができ、子どもたちとともに学ぶ楽しさと喜びを改めて味わうことができるのです。

「永平寺町学校のあり方検討委員会」の第１回ワーキンググループでも、これからの社会を見すえた能力を子どもたちに育む必要性、デジタルを活用した教育の推進、これら学校と教師たちの新しい挑戦を支える地域と家庭の役割、そして、子どもたちが中心となって学校・地域・家庭を盛り上げていくといった、さらに新しい可能性も示されました。こうした挑戦を実現するには、生涯にわたって子どもたちと大人たちが学び続ける学校・地域・家庭を永平寺町に打ち立てることが期待されます。

そのために、大人たちがすべての子どもたちの可能性を信じ、引き出すというコンセンサスをもつ必要があります。永平寺町に住むすべての子どもたちが、より良い未来社会を築く大きな可能性をもっています。子どもたちはみな、これから出会う新しい社会に希望を抱き、その社会で求められる能力を希求し、その能力を育む学びへの挑戦意欲をもっているのです。この子どもたちの意欲は、本検討委員会で実施したアンケート結果からよく見ることができるでしょう。

④提言

新しい時代の教育の推進に向けて、学校では子どもたちの主体的・対話的で、そしてより深い学びを保障するための挑戦を一層継続していく必要があります。そのためには、教師たちが管理職と学校職員と互いに助け合い、学び合うことのできる学校文化と、永平寺町内外の学校間ネットワークを編み込む必要があります。

大学等の高等教育機関と連携しながら、教師たちが新しい教育方法や授業モデルに協働で挑戦するための研鑽を積み、学校内外の学びの機会をつなぐシステムを構築する必要があると考えます。

(2) 望ましい教育環境のあり方について

①学校規模の適正化について

永平寺町のこれからの小・中学校のあり方を考えた時、私たちは、今一度、学校の果たす役割を再確認する必要があります。義務教育段階の学校は、児童生徒の能力を伸ばしつつ、社会的自立の基礎、国家・社会の形成者としての基本的資質を養うことを目的としています。

「子どもたちが、集団の中で多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人ひとりの資質や能力を伸ばしていく」という学校の特質を踏まえ、小・中学校では、一定の集団規模が確保されていることが望ましいと考えられています。

子どもたちに、単に教科等の知識や技能を習得させるだけではなく、集団の中で仲間と学び合うことを通して、子どもたちの思考力、表現力、判断力、問題解決能力等を育み、社会性や規範意識を身に付けさせることは、教育上極めて重要なことです。

そのような教育を十分に行うためには、一定の規模の集団が確保されていることや、経験年数、専門性、男女比等について、バランスのとれた教職員集団が配置されていることが望ましい環境として求められます。より良い教育環境を実現するためには、一定の学校規模の確保について検討する必要があります。

法令上、学校規模の標準は学級数により設定されており、小・中学校ともに「12 学級以上 18 学級以下」が標準とされていますが、この標準は「特別の事情があるときは、この限りでない」という弾力的なものとなっています。

※学校教育法施行規則 第 41 条（第 79 条により中学校にも準用） 「小学校の学級数は、12 学級以上 18 学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。」

様々な要素が絡む困難な課題ですが、学校教育の目的や目標をより良く実現するため、あくまでも子どもたちの教育条件の改善の観点を中心に、学校規模の適正化を検討しなければなりません。これからの時代に求められる教育内容や指導方法の改善の方向性も十分考慮して、具体的な課題を分析し、保護者や地域住民からの意見も参考にして、より良い教育環境を考える必要があります。

【小規模校であることのメリット】

一般に小規模校には、下記のようなメリットがあります。小規模校であることのメリットを活かして子どもたちの教育を行うことは重要です。

・一人ひとりの学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、きめ細かな個別指導を行いやすい。

・意見や感想を発表できる機会が多くなり、様々な活動において、一人ひとりがリーダーを務める機会も増える。
・余裕を持って運動場や体育館、特別教室等を使用できる。
・異なる年齢の学習活動を組みやすく、校外学習も含めた様々な体験の機会を取り入れやすい。
・地域の協力が得やすく、郷土の教育資源を活かした教育活動が展開しやすい。
・児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境等が把握しやすく、保護者や地域と連携した効果的な指導ができる。
・ＩＣＴ教材等を効果的に活用し、一定レベルの基礎学力を全ての児童生徒に保障できる。
・個別指導等を通じて学習内容を定着させるための十分な時間を確保できる。
・総合的な学習の時間において、個に応じた学習課題を設定し、複数年にわたり徹底的に追究させることができる。
・生徒会活動や各種の班活動等を通じて、すべての児童生徒が役職を経験でき、活躍の場がある。
等

【小規模校であることのデメリット】

一般的に、小規模校には下記のようなデメリットがあります。小規模校であることのデメリットについては、今回のアンケートでも数多くの記述があり、学校の児童生徒数や統廃合に関する意見が出されました。

・多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる。
・多種多様な価値観に触れにくくなる。
・社会性の育成に制約が生じる
・集団の中での多様性やルールを学びにくい。
・男女の程良いバランスの中で学べない。
・コミュニケーション力を高めにくい。
・合唱、スポーツ、ディスカッション等は、人数が少なすぎると成立しない。
・クラブ活動や部活動の種類が限定されがちで、選択の幅を広げることができない。
・ある程度の人数がいないと、ディベート学習が成り立たない。
・子ども同士の人間関係が固定されがちになる。
・教員数が少ないので、多様な個性の教員から学べない。
・他のクラスとの交流・比較・競争等をすることができない。
・班活動に制約が生じ、話し合いが活性化しにくく、いろいろな意見が出にくい。
・「同じ」と「違う」の両方を考えることができない。
・同学年同士の交流が制限される。
・人数が少なすぎると新しい環境に順応しにくい。
・人間関係にトラブルがあった場合にクラス替え等の逃げ場がない。
・マイノリティへの配慮を学べない。
・少なすぎると学習に対する意欲が出にくい。
・切磋琢磨して視野を広げにくい。
・財政面で効率が悪い。
・クラス分けができず、固定した集団での生活を変えられず、新たな人間関係を築けない。
・習熟度別指導等、クラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい。

・男女の構成比の偏りが生じやすい。
・学習や進路選択の模範となる先輩の事例が少なくなる。
・特定の子どもの行動にクラス全体が大きく影響を受ける。　等

【教職員数が少なくなることによる課題】

小・中学校共通して、学級数が少なくなると、配置される教職員数は少なくなります。このことにより、下記のような教育活動上の大きな制約が生じます。

・経験年数、専門性、男女比等バランスのとれた教職員配置が困難となる。
・すべての教科の専門家を配置できなくなる。
・ティーム・ティーチング、習熟度別指導、専科担任制等の多様な指導方法をとることが困難となる。
・教職員一人当たりの校務負担や行事に関わる負担が重く、校内研修の時間が十分確保できなくなる。
・教員同士が切磋琢磨する環境をつくりにくく、指導技術等の互恵的な学び合いがやりにくい。
・学年会や教科会等が成立しないので、協働的に学ぶ力が弱くなる。
・学校が直面する様々な課題に対して、組織的対応をとることが難しくなる。
・クラブ活動や部活動の指導者確保が困難となる。
・免許外指導の教科が生まれる可能性がある。　等

【望ましい学級数の考え方】

望ましい学級数を考えた場合、小学校では、まず複式学級を解消するためには、少なくとも 1 学年 1 学級以上（全校で 6 学級以上）であることが必要となります。また、全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を超えた集団を編成したり、同学年に複数教員を配置するためには、1 学年 2 学級以上（全校で 12 学級以上）であることが望ましいと考えられます。

中学校についても、全学年でクラス替えを可能としたり、学級を超えた集団編成を可能としたり、同学年に複数の教員を配置するためには、少なくとも 1 学年 2 学級以上（全校で 6 学級以上）が必要となります。また、免許外指導をなくしたり、全ての授業で教科担任による学習指導を行ったりするためには、少なくとも 9 学級以上を確保することが望ましいと考えられます。

【望ましい児童生徒数の考え方】

各学年の学級数は同じ 1 クラスであっても、児童生徒数が極端に少ない場合には、教育活動の質の維持が困難になることがあります。このため、学校規模の適正化の検討に当たっては、学級数の他にも、1 学級の児童生徒数や学校全体の児童生徒数について考慮する必要があります。

学級は、児童生徒が学校生活の大部分を過ごす基本単位です。学級における児童生徒数が極端に少なくなった場合、前述のデメリットで示した様々な課題が生じます。これからの教育においては、画一的な教師主導の一斉授業だけではなく、子どもたちが自ら課題を設定し、主体的に学び合う協働的な学習を通じて、意欲や知的好奇心を高めることが求められています。しかしながら、学級の児童生徒数があまりにも少ない場合は、班活動やグループ分けのパターンや協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じて、新たな時代に求められる教育活動を充実させることが困難になります。

一人に１台のタブレットを配布して、他校との遠隔交流授業などを行えば、デメリットは以前よりは解消されますが、万能ではありません。大学生であっても、「オンライン授業ばかりが続くのは、とても辛い。」というような報告が上がってきています。オンライン授業は、確かに便利で、コロナ禍の非常事態では重要な教育ツールとして機能しましたが、対面での授業とは違い、相手の表情や感情をうまく読み取ることができなくて、ストレスがたまるとか、長時間使用していると目が疲れてしまう、というような弊害も出てきました。特に義務教育の段階の子どもたちは、仲間との雑談やいろいろな遊びを体験することで多くのことを学び、成長していきます。

このことに関しては、この委員会の中でも委員の皆さんが指摘をされていました。「自分たちが子どもであった頃は、ふるさとの自然の中で友達とともに遊んだことがとても楽しく、思い出として残っている。」というような意見でしたが、とても重要な指摘であると思います。この先、テクノロジーはどんどん発達するでしょうが、それはあくまでもツールであって、仲間と共に為すことによって学ぶということは、いつの時代においても教育の根幹であって、失われるべきではないということを押さえておきたいと思います。

今回のアンケートでは、小・中学校のすべての教員が、学級の望ましい環境について回答をしています。先生方は、この中で学級の望ましい環境について、自身のこれまでの学校での教育実践を振り返り、未来の展望を見据えて、明確に回答しています。それは、1 学級 10 名以下の人数が常態化した場合は、よりよい環境とは言えないという結論でした。

〇小学校

小学校においては、最低限度 1 学級 10 名の人数は必要です。できれば 1 学級 20 名前後の学年複数クラスを理想的と考えています。

〇中学校

中学校においては、発達段階から、集団の中で多様な意見等に触れ、より大きな集団で切磋琢磨して協働で学び合う環境が必要であるとして、学年複数クラス、できれば３～４クラスが理想的であると考えています。このような集団だとクラブ活動、部活動、委員会活動が充実し、クラス替えも可能になります。こうした環境は、子どもたちの成長や学びを支えるだけでなく、教師集団の成長にとっても望ましい環境となります。

なお、1 学年 1 学級ならば、最低限度 20 名前後の人数は必要です。地元の教育に精通している教育のプロである教員の悉皆調査の声は大変貴重であり、尊重すべきと考えます。1 クラスが 10 名未満の学級では、子どもたちの最適な学びを保障できません。そういう場合は、子どもたちの可能性を広げるために、学校の統廃合について該当地域との話し合いを持つ必要があります。

【望ましい環境に関する各小・中学校の今後の予想】

永平寺町の小・中学校の児童生徒数は、平成 31 年度を基準とすると、令和 15 年度には約 7 割に減少することが予想されています。（資料６参照）今後の児童生徒数推計を勘案して、各小・中学校が子どもたちにとって望ましい教育環境であるか、再編等の検討が必要であるか、以下に分類します。

なお、今後、児童生徒数が大きく増減することが見込まれるような情勢の変化があった場合には、現時点での判断にとらわれることなく、その時点での将来推計を踏まえて、柔軟な対応をとる必要があると考えます。

○小学校

＜松岡小学校＞

令和 15 年までの児童数推計は、減少することなく微増傾向となります。各学年 2 クラスの学級数が維持でき、子どもたちにとって望ましい環境の範囲内と考えます。

＜吉野小学校＞

令和 6 年度の全児童数は 60 名で、半分の学年が 10 名未満となります。その後、大きく減少することはなく微減状態で推移し、令和 15 年は、全児童数 54 名で各学年 9 名となることが予想されます。子どもたちにとって望ましい環境としては、許容範囲ぎりぎりの状況が続きます。

＜御陵小学校＞

令和 7 年度から、全児童数が 100 名未満となり、減少傾向が続きます。令和 15 年は、全児童数 86 名で各学年 14～15 名となることが予想されます。クラス替え等はできないものの、子どもたちにとって望ましい環境の範囲内と考えます。

＜志比小学校＞

令和 15 年までの児童数推計は、減少傾向が著しい状況にあります。全児童数は、令和 6 年度から 100 名を下回り、令和 15 年度には 58 名となることが予想されます。令和 4 年度からは、1 学年の 10 名未満の学年が出現し、子どもたちにとって望ましい環境としては許容範囲ぎりぎりの状況が続きます。

＜志比南小学校＞

令和 15 年までの児童数推計は、減少傾向が著しい状況にあります。令和 7 年度から半分の学年で児童数が 10 名を下回ります。令和 15 年度は、各学年 5 名の全校児童数 30 名となることが予想されます。小学校においては、最低限度 1 学級 10 名の人数が必要であるという子どもたちにとって望ましい環境の理想を下回ります。近隣小学校との再編協議が必要と考えます。

＜志比北小学校＞

平成 31 年度から、すべての学年が 10 名未満となります。令和 4 年度の新入生は 1 名で、半分の学年で 5 名以下となり、集団としての学習が成立しにくくなります。令和 15 年度は、全学年 2 名で全校児童数 12 名となることが予想され、長期的な極小規模が常態化します。子どもたちのより良い学びの環境のために、至急、近隣小学校との再編協議が必要と考えます。

＜上志比小学校＞

令和 6 年度から、全児童数が 100 名未満となり、減少傾向が続きます。クラス替え等はできないものの、各学年が 10 名未満になることはありません。令和 15 年度は、全児童数 75 名で各学年 11～13 名となることが予想されます。子どもたちにとって望ましい環境としては、許容範囲ぎりぎりの状況が続きます。

②小学校の提言

志比北小学校は、令和 4 年度の新入生が 1 名となり、このままだと小学校 6 年間を同級生のいない状態で過ごすことになります。このような環境では、協働での学び合い等ができず、至急、改善が必要です。近隣の志比小学校との再編を検討すべきと考えます。

志比南小学校は、令和 7 年度から望ましい環境を維持しにくくなる状況が続きます。志比北小学校と志比小学校との再編協議の時に、併せて検討すべきと考えます。

上志比小学校については、小規模校の状況が予想されますが、上志比地区唯一の小学校であり、存続する方向で支援するのが望ましいと考えます。

○中学校

＜松岡中学校＞

令和 15 年までの児童数推計は、微減傾向が続きます。平成 31 年度の全生徒数は、304 名ですが、令和 15 年度は、277 名まで減少します。各学年複数クラスを維持することができ、子どもたちにとって望ましい環境としては理想的であると考えます。

＜永平寺中学校＞

令和 15 年までの生徒数推計は、減少傾向が著しい状況にあります。全生徒数は、令和 10 年度から 100 名未満となり、令和 15 年度には 59 名へと急減します。各学年 1 クラスの 20 名程度の生徒数でクラス替えはできなくなります。子どもたちにとって望ましい環境としては、許容範囲ぎりぎりの状況が続きます。

＜上志比中学校＞

平成 31 年度からすべての学年で 1 クラスの状況が続きます。令和 9 年度までは、各学級の人数は 20 名前後で推移し、その後は減少に転じ、令和 15 年度は各学級 13～14 名となります。各学年においてクラス替えはできず、部活動の選択肢も制限されます。子どもたちにとって望ましい環境の視点からは、近隣の中学校との再編を至急、検討すべきであると考えます。

③中学校の提言

上志比中学校の生徒は、小学校 1 年からずっと 1 学級で、同じ人間関係の中で過ごしています。子どもたちは、発達段階の中で多様な仲間と切磋琢磨し合いながら成長していきます。クラス分けができず、部活動等の選択肢も制限される環境は理想的とは言えません。近隣の永平寺中学校との再編を至急、検討すべきと考えます。

永平寺中学校については、将来、生徒数が激減することが予想されています。その際は、次の段階として近隣の松岡中学校との再編も検討しなければなりません。このように中学校については、子どもたちにとって望ましい環境を確保するために、二段階方式で町内の中学校を１つの中学校に再編することも選択肢の１つとして考えておかなければなりません。

【配慮事項】

小・中学校は、地域コミュニティの１つの拠点であり、地域とともに歩んできた歴史があります。旧上志比村、旧永平寺町、旧松岡町のそれぞれの地域内に１つも学校がなくなってしまうようなことは、防災や地域活性化の面からの問題も多く、地域の人々にとっては、とても辛いことだと推察できます。そのような場合には、特段の配慮が必要で、とりわけ小学校においては、地区との結びつきが強いことを考慮して、子どもたちの数が減少しても存続の可能性を探る必要があります。その際は、教育の機会均等とその水準の維持向上により、等しく質の高い教育を受けることができるよう、教育予算等における特段の支援が必要となります。子どもたちにとって、より良い環境となるような教育振興策を求めます。

また、再編を実施する場合は、子どもたちの人数だけで結論を出すのではなく、子どもたちにとって過度の負担にならないよう、通学時間や通学方法、通学区域等も十分勘案して、地域との協議を行うべきと考えます。

今後、永平寺町の教育大綱や教育振興基本計画等を策定する際は、この答申の趣旨を十分に活かして、子どもたちの学びの環境をより良いものにすることを要望します。

(3) 地域と連携した学校づくりのあり方について

①地域とともにある学校づくり

学校は、児童生徒の教育のために設置されている施設であり、学校再編等の協議に当たっては、あくまでも児童生徒の教育環境の改善を中心に据えるべきですが、地域住民から見た学校は、地域社会の将来を担う人材を育てる中核的な場所であるとともに、防災、保育、地域の交流の場等、様々な機能を有してます。

子どもに求められる資質や能力は、多様な人々との関り、様々な経験を重ねていく中で育まれるものであり、学校のみで育成できるものではありません。加えて、近年の社会の変化に伴い、多様化・複雑化するニーズに学校の教職員や教育行政の力だけで対応していくことは、困難となっており、学校がその目的を達成するためには、保護者・地域住民等の支えが必要であり、共に学校運営に関わっていく「地域とともにある学校づくり」が一層、求められてきています。

学校が地域づくりの中核になるためには、子どもたちと教職員が生き生きと学び、育ち合う「力強い学校」でなければなりません。適正化をめぐる学校の再編の問題は、「地域とともにある学校づくり」とも関わるので、この問題は、地域によって実状が様々で、難しい問題ではありますが、地域の英知を結集して、計画的、総合的に判断しなければなりません。

その様な中で過疎や少子化の問題が進展する中、地域という枠組みを決して変えてはいけないものと固執して考えるのではなく、より柔軟に地域そのものの枠組みを捉え直して、「地域とともにある学校づくり」に挑戦して、成果を上げている事例が県内外で数多く見られます。

福井県美浜町の学校再編においては、７校の小学校が３校に再編されました。再編により、少なかった学級の人数は、20 名程度の理想的な集団となり、子どもたちは広くなった校区を舞台に自分たちのふるさとの課題を仲間と共に探究し、より良い解決策を地域住民と共に形にしていきました。３校がバラバラにふるさと学習を展開するのではなく、３校が協働でカリキュラムを開発して、共に学び合っています。この事例からは、これから特に重要となる「みんなが幸せな社会となる持続可能な社会づくり」への意欲が読み取れます。ふるさと教育というプロジェクト学習により、子どもたちは、主体的に学び、探究力やコミュニケーション力を高めています。(資料 11 参照)

いつの時代も子どもたちは、地域によって育てられ、地域は、その子どもたちの成長によって支えられていきます。教育は、学校だけで行われるものではありません。家庭や地域社会が、教育の場として十分な機能を発揮することで、子どもたちは、夢や希望を持って地域の未来を切り拓く人材へと成長していきます。子どもたちが、地域への愛着や誇りを持って、ふるさとのあり方やより良い未来をデザインしていくような教育が極めて重要です。

このような観点から、永平寺町においても、小・中学校におけるふるさと教育をこれからの学校教育の中核に据える必要があります。学校を地域づくりの核として、子どもと大人が共に学び合って地域づくりの挑戦を続ける特色ある教育の推進が求められます。

県内外の事例からは、学校の再編によって、「友人が増えた」「教育活動が充実した」「学校が楽しいという子どもたちが増えた」「ふるさと教育が充実した」「学校に活力がうまれた」「向上心が高まった」「社会性やコミュニケーション力が高まった」等の効果が数多く報告されています。未来を生きる子どもたちが、ワクワクしながら新しいことに挑戦し、元気にふるさとについて学び続けるような学校になることを期待したいと思います。

②学校の枠を超えたふるさと教育の推進

永平寺町の小・中学校では、総合的な学習の時間を核として、それぞれの校区に関する探究的な学習が行われています。地域の人もゲストティーチャー等として学校を支援しています。それぞれの学校は、永平寺町の豊かな自然・文化・歴史・伝統・産業等の教育資源を積極的に活用した地域学習やふるさと教育に取り組み、大きな成果を上げています。

今回のアンケートで、自分たちの校区の自然、文化、歴史、産業のことは分かるけれども、永平寺町内の他の校区のことはよく分らないという課題が浮かび上がりました。子どもたちは、永平寺町のことを学びたいと思っていますし、先生方や保護者もその必要性を感じています。自分たちの校区の特色や課題を互いにプレゼンし合うような、永平寺町ならではの統一したふるさと教育のオリジナルカリキュラムの創造が求められます。このカリキュラムづくりで大切にしたい価値観は、以下の通りです。

・小学校と中学校の接続を重視して、小学校３年から中学校３年までの総合的な学習の時間や特別活動等の時間を連関したカリキュラム編成により、長期的な取り組みとして、ふるさと教育を展開する。
・子どもの意欲や知的好奇心を真ん中に置いた、主体的で探究的で協働的な学びを継続的に実践する。
・永平寺町の小・中学校のそれぞれの地域について、互恵的に学び合うことで、ふるさと永平寺町に対する愛着と誇りを培う。
・持続可能でウェルビーイングな社会を目指した探究的なプロジェクト学習を継続することで、これからのふるさとを担う当事者意識を高める。
・主体的に粘り強く学び続ける子どもたちと教師集団を地域が支え、大学等の教育機関とも持続的なネットワークを構築することで、地域全体の活性化に資する。

カリキュラム作りについては、このような価値観を共有したうえで、具体的な内容を検討するワーキンググループを組織する必要があり、子どもたちの学びを真ん中に置いた魅力的なカリキュラム編成を期待します。

③学校と地域をつなぐコーディネーターの配置

働き方改革の中で教員の多忙化が大きな問題となっています。地域づくりの核として学校でふるさと教育を推進しようとすると、計画、交渉、実践、評価等のために、どうしても教員の時間的な負担が増大します。

「地域とともにある学校づくり」を運営していくためには、学校と地域をつなぐコーディネーターの配置が必要不可欠です。教育行政には、学校にコーディネーターを配置し、協働でチーム学校を支えていく仕組みづくり、予算措置等が求められます。また、ふるさと教育を支援する人材の育成のための研修についても、計画的に取り組まねばなりません。

新たに地域コミュニティを創り出すという視点に立って、学校と地域の人々、保護者等が力を合わせて、子どもたちの学びや育ちを支援するシステムの構築が求められます。

④提言

永平寺町ならではの統一したふるさと教育のオリジナルカリキュラムを創造するべきだと考えます。オリジナルカリキュラムについては、子どもの意欲や知的好奇心を真ん中において、教師主導の教え込みからの転換が求められます。主体的で探究的で協働的な子どもの学びを尊重し、小・中学校の接続を大切にした長期的で継続的な取り組みを意識する必要があります。また、学校と地域をつなぐコーディネーターを配置して、学校の枠を超えたふるさと教育を展開するとともに、ふるさと教育を支援する人材育成のための研修についても、取り組まなければなりません。

おわりに

本検討委員会は、現在の永平寺町小・中学校の状況および将来予想を踏まえ、「望ましい教育環境のあり方」並びに「地域と連携した学校づくりのあり方」について、子どもたち、教師、保護者、地域住民の声も考慮した上で、検討を進めてきました。

変化の激しい未来社会を生き抜く子どもたちのために、望ましい教育環境をどう保障していったらよいのか。この大変重要なテーマについては、将来の児童生徒数も見据えて、望ましい教育環境について多方面からの議論を重ねてきました。各層からの貴重なアンケートにより、民意の方向性を知ることもでき、一人ひとりの子どもたちの可能性を拓くという視点から具体的な提言をまとめることができました。

また、地域と連携した学校づくりにつきましては、総合的な学習の時間でのふるさと教育を核として、永平寺町として統一したふるさと教育のカリキュラムづくりの必要性等についても提言することができました。

いずれのテーマの話し合いでも、委員各自の経験や見識等に基づく多様な意見が出されました。そして、会議での協議内容については、それぞれの団体に持ち帰り、団体の中で議論を深めて練り上げられ、委員会の中における、より深い話し合いへとつながっていきました。

そのような歩みを繰り返していく中で、全員の総意として本答申をまとめることができました。この答申が、児童生徒の心身の健やかな成長に寄与し、永平寺町小・中学校の教育環境の整備および充実に役立つことを心から願っております。

永平寺町学校のあり方検討委員会

平成２８年度「福井型コミュニティ・スクール推進事業」実施要項

福井県教育委員会

１　目的

県内すべての小・中学校に設置された「家庭・地域・学校協議会」において、保護者・地域住民・学校の代表が子どもたちの成長や教育にかかわる課題について一元的に協議し、それぞれが責任を持って取り組むことにより、地域全体の教育力向上に資する。

２　事業主体

市町教育委員会

３　福井型コミュニティ・スクールの理念

福井型コミュニティ・スクールは、家庭、地域、学校が連携し、地域の特性や実情を活かしながら、地域に根ざした開かれた学校づくりを目指すものである。その特長は、それぞれの代表で構成する「家庭・地域・学校協議会」を設置し、地域全体の教育・子育て方針や学校運営の基本方針を策定するとともに、それぞれが責任をもって活動を行うことである。

４　家庭・地域・学校協議会の設置

（１）家庭・地域・学校協議会の構成

委員については、保護者、地域住民および教職員で構成することとする。

（２）委員の選考

委員の選考は、次の事項について配慮する。

・校長が目指すべき学校運営を考えて、適切な人材を選考する。

・男女比、地区、年齢、職業等に配慮し、バランスのとれた委員構成になるように選考する。

・地域住民の代表については、どのような分野での意見を期待するのかという観点から選考する。

（３）委員の任命

校長が推薦し、設置者が委嘱することが望ましい。

（４）活動内容

家庭・地域・学校協議会では、具体的には次の事項について協議することが求められる。

①　具体的な学校運営に関すること

・学校教育目標、学校運営方針、教育課程の編成等

・教育内容や学校行事等の企画・運営

・地域の特性に応じた特色ある学校づくり

・教育活動への地域人材の積極的活用

②　学校評価に関すること

・保護者や地域の意見を反映した学校運営方針の策定

・学校関係者評価による学校運営の改善

③　地域の行事や活動への児童・生徒、教職員の参加に関すること

④　子どもの安全や居場所づくりに関すること

・見守り活動の実施や子どもへの指導

・学校の空き教室、児童館、公民館等を活用した放課後の居場所づくり

⑤　家庭や地域全体の教育に関すること

・家庭や地域における子育て等の課題

・地域全体の教育・子育て方針の策定

⑥　異校種間（保・幼・小・中・高）の連携に関すること

（５）小・中学校の合同開催

異校種間の円滑な接続や地域全体の教育力をより一層向上するという観点から、小・中学校の合同開催を実施し、情報交換や連携を図ること。

５　地域コーディネーター（平成２８年度から指定校で順次、任命）

（１）任命

校長が推薦し、設置者が委嘱することが望ましい。

（２）活動内容

地域の様々な団体と連絡・調整を行い、子どもたちの体験学習を支援する。

６　計画書および報告書の提出

本事業の推進にあたり市町教育委員会は、学校毎に計画書および報告書を作成させるとともに、その一部を福井県教育庁義務教育課に提出すること。

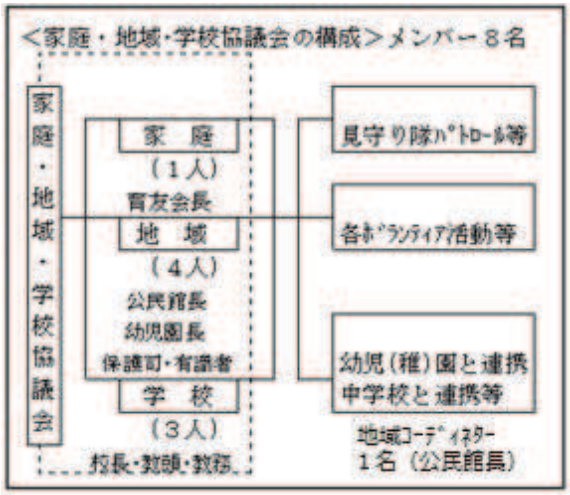
（様式３）

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

永平寺町　松岡小学校

１「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成



（２）協議会の内容

＜１回目＞７月２９日(水)
○委員長選出○役割について
○スクールプラン・年間計画について
○Ｒ２年度「地域と進める体験推進事業」の持ち方
＜２回目＞２月２４日（水）
○学校評価について
○今年度の成果と課題について
○Ｒ３年度「地域と進める体験推進事業」の持ち方
○次年度へ向けて
○その他

（３）協議会における成果と課題

今年度は新型コロナウイルス感染防止のため、学校行事に参加していただいたのは、授業公開日だけだったが、委員５名の方からは、本校の教育について理解を示していただいた。また、松岡地区をよく知っている方々ばかりで、地域学習計画立案のときには、地域のことや人材のことを紹介していただけた。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

本校では、「心が育ち一人一人が伸びる学校～あたたかい人間関係を通して～」の学校教育目標のもと、「かかわる活動」を重視し、教育課程を展開してきた。教材とのかかわりや人とのかかわりの中から、「仲間と学び合いながら課題を解決しようとする力」および「自ら課題に取り組み、仲間とともに高め合おうとする力」を育みたいと考えた。そこで、その活動を学校外にも広げることで、児童の育ちと学びを支える環境を豊かにし、人間的なつながりをさらに深めることができると考えた。さらに、児童が地域を知り、そして、地域を発信する体験学習を実施することで、郷土に誇りや愛着を持ち、将来地域を支える人材へと繋がっていくと考える。一昨年度から本事業の指定を受けて、これまでの地域学習を再確認して、３年生と６年生の活動に重点を置き、「ふるさと永平寺町を知ろう、知ってもらおう」という活動テーマとしての取り組みを再構築した。

３年生では、永平寺町内の特色を発見する活動を多く取り入れ、松岡地区だけでなく、永平寺町の他の地区についても広げる活動を行う。また、地域に在住の方を「松岡お宝発見隊」と称して学校に招き、ふれあい活動を進める。６年生では、永平寺町の特色を調べ、本町のすばらしさを修学旅行先においてＰＲ活動を行い、地域のことを県外に広めることをねらいとした。

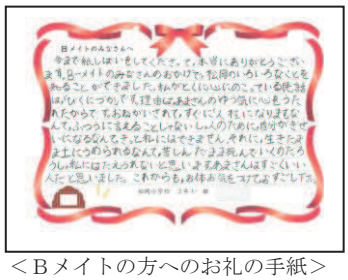
（２）活動の実際

①３年総合的な学習「永平寺町のおたからを発見しよう」

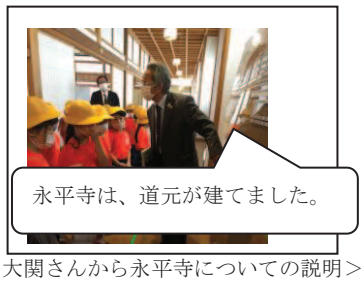
３年生は、今年度も松岡地区だけでなく永平寺町全体について調べる活動を行った。まず学校で下調べを行い、地域産業施設や歴史的建造物などの見学と体験活動を行った。また、地元の紙芝居サークル「Ｂメイト」を招き、永平寺町に伝わる民話を教えてもらった。そして、自分たちが調べたことや見学体験したことを模造紙や紙芝居にまとめ、来年活動を行う２年生に対する発表活動につなげた。

（様式３）

＜Ｂメイトの方から伝説紹介＞



＜Ｂメイトの方へのお礼の手紙＞



＜大関さんから永平寺についての説明＞

②６年総合的な学習「ふるさと永平寺町のＰＲをしよう」

今年度６年生は、１０月の修学旅行において京都（三条地下街）で京都三条地下街での永平寺町ＰＲ活動を行う予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大により変更が余儀なくされた。結果、県内での実施となり、さらに、密回避のため不特定多数の接触もできなくなった。そこで、ＰＲＴシャツを着ることで、「永平寺町」から来たことを視覚的にアピールし、声掛けをしてもらったことをきっかけに地域を紹介する活動にとどめた。

＜若狭神宮寺＞

＜若狭国分寺＞

＜若狭おばま食文化館＞

（３）特に工夫した事項

今年度は、学年色を規準とした「活動用Ｔシャツ」を作った。そして、昨年度と同様に、背中プリントロゴをえい坊くんで統一し、胸プリントロゴを各学年テーマとし、日頃の調査活動や発表活動でも着用して行った。日頃用いている色を纏うことで、児童の活動意識を高めることができた。また、町民に対して活動のアピールになったと思われる。

２　地域コーディネーターについて

（１）地域コーディネーター（１名）　松岡公民館長　堀江　俊子　氏（家庭･地域･学校協議会委員長）

（２）地域コーディネーターの活動概要

今年度も家庭･地域･学校協議会で地域コーディネーターの依頼を行った。永平寺町松岡公民館長としての人脈を生かして、低学年まち探検等の助言をいただいたり、今年度は、３年総合的な学習「永平寺町のおたからを発見しよう」の永平寺町紹介についてのアドバイスをいただいたりした。

３　成果と課題

３年間かけて３年生と６年生に活動用Ｔシャツを配布してきた。これで、この事業発足時の全児童（当時の１年生～６年生）に生き渡ったことになる。『ふるさと永平寺町を知ろう、知ってもらおう！！』と共通のテーマを掲げ、１年から６年までの縦断的な学習として捉えて取り組んだことは、地域をより良く知ることや愛着を持つことに繋がったと思われる。さらに、そのような活動が、松岡小学校の伝統にもなりうるものだと感じた。実際、４年生などは、昨年度のＴシャツを着用して福祉体験活動に参加するなど、「地域の方とふれあおう」という意識が伝わってきた。

ただ、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、活動に大きな制限が強いられた。６年生の修学旅行におけるＰＲ活動や、学校近くの松岡公園の清掃活動も行えなかった。しばらくこの状況は続くと考えられる。「できない」ではなく、「できることは」と意識を変え、活動をどのような形で継続していくかが、今後の課題である。

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

永平寺町吉野小学校

１「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

町議会議員（１）
区長会長（１）
公民館長（１）
放課後児童クラブ指導員（１）
ＰＴＡ会長（１）
学　校（３）
合計８名

地域コーディネーターは
公民館長が兼ねています。

（２）協議会の内容

◇第１回　７月９日（木）
・今年度の計画および行事や学習の進め方について
◇第２回　１０月２３日（木）
・指導主事訪問日に児童の様子の参観
◇第３回１１月１４日（土）
・学校公開日を利用した児童の様子の参観
◇第４回１月２９日（金）
・年間を通しての学校状況の報告
・次年度に向けての協議　等
◇第５回　２月６日（土）
・学校公開日を利用した児童の様子の参観

（３）協議会における成果と課題

学校行事等（畑、田んぼ、花壇）の協力を地域の方に依頼できている。
コロナ禍の行事や活動のあり方について意見をもらい､教育活動の改善の参考となっている。
児童の実態を話し合うことで、目指す児童の姿を共有できている。

２ 地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

①豊かな自然環境の中での農業体験活動を通して、自然を愛し、働くことの喜びや尊さを体得させる。
②様々な体験活動を通して、仲間と協力したり、仲良く助け合ったりする心を育てる。
③稲作や野菜の栽培活動をする中で、見つけたり、考えたり、調べたりすることを通して、ものの見方や考え方を広げるとともに、食に対する感謝の念や命を大切にする心を深め、食を大切にする心を育てる。
④地域の方々から農業に関する様々な知識を教えていただくことによって、「地域との交流」を図る。

（２）活動の実際

①米作り体験と地域での販売～地域から学び地域に返す活動

【田植え】

コロナ禍の状況で学校は臨時休業中であったのため、今年度は田んぼの所有者（地域ボランティア）の方に田植えをお願いした。

【稲刈り】

９月１５日に、全校児童により稲刈り体験と脱穀を行った。新型コロナ感染防止対策のため、２学年ずつ稲刈りを行い、最後に６年生が　ボランティアの方と一緒に脱穀作業を行った

【米販売体験】

米の販売活動を１１月１４日に行った。５・６年生が販売の仕方や広報の仕方を考え、販売所のレイアウトも工夫しながら行った。盛況の内に完売した。

②野菜作り体験を通して地域の特色を知る活動（全学年）

【苗植え】

５月１７日、学校の畑「よしのっこ農園」で苗植えを行った。臨時休業期間であったため、事前に畑を耕したり、植える作物を決めたりするのは、教員と地域のボランティアが協力して行った。夏野菜を中心に栽培することにした。

【世話】【収穫】

毎朝の水やりや除草等、日々の世話を学年ごとに児童の当番を決めて行った。野菜の中には７月ごろから１０月ごろまで、毎日のように収穫することが できるものもあり、作物の違いについても実感していた。また、７・８月にはスイカやメロンなど収穫した果物をみんなでおいしく食べることができ、収穫の喜びを味わうことができた。

（３）特に工夫した事項

単なる米作り・野菜作り体験にとどまるのではなく、田植え・苗植えや収穫等の生産から販売等流通に至る一連の流れを視野に入れ、コロナ禍にあってもできる活動を５・６年生の児童を中心に計画を立てさせて行った。「感謝の会」では、学校を陰ながら支えてくださった地域の方へ改め感謝する活動を行い、地域の一員であるという自覚や地域の良さを振り替えられるようにした。

（４）地域コーディネーターの活動概要

本校の体験活動を米作りと野菜作りを中心にしたものということもあり、農業に関する知識の豊富な方にコーディネーターを委嘱した。稲刈り体験では、自身の持つ農業に関する知識を活かして児童への指導も行った。

（５）成果と課題

米離れが進む昨今、幼い頃から稲作や野菜作り体験を行うことによって、その大変さと楽しさ、収穫の喜びを味わい、米作りに関わる方々への感謝の気持ちが育まれることを目指して活動を進めてきた。今年は、コロナ禍という状況で、昨年まで行っていた活動でできないものもあったが、できることを児童が主体的に考えて実行することができた。

今後も多くのボランティアの方と交流することを通して、学びを広げたり深めたりできるよう、カリキュラムを改善し、効果的で効率的な学びの場を確保していきたい。

（様式３）

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

永平寺町　御陵小学校

１「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

永平寺町子ども会育成連絡協議会長（１名）
　※地域コーディネーター委員長
地区公民館館長（１名）
　※地域コーディネーター
育友会(PTA)代表（１名）
幼児園園長（１名）
地区子育て支援員代表（１名）

（２）協議会の内容

７月：本会の趣旨，活動方針の説明，協議
　　本校の教育方針，教育計画の説明
１２月：教育活動及び地域と進める体験推進事業
　　の経過報告，学校評価の計画について
２月：学校評価書の考察
　　今後の活動とその関わり方の検討
　　次年度の組織，活動の見直し

（３）協議会における成果と課題

重点事項１「学校･地域･家庭の連携，および，学校評価による改善」については，協議会で話し合われた内容を教育活動に生かすことができた。コロナ禍における学校での新しい生活様式での教育活動が行われていることに，家庭や地域で協力できることをしていきたいという力強いご意見をいただけた。重点事項２「幼児園および中学校との連携推進」については，昨年度からの課題であった幼小合同の引き渡し訓練が実現した。その他，地区の危険箇所について，地域と学校の両面から要望を出すことができ，改善につながった。今年度は，地域の大きな行事がほとんど中止となったが，来年度はコロナ禍における実施を目指してお，地区体育祭は，今年度実施できた校内体育大会も参考にし，計画をしているそうだ。学校教育の充実，地域活性化，防災体制など，学校と地域の連携が今まで以上に必要であると考える。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

・豊かな自然環境の中での農業体験活動を通して，自然を愛し，働くことの喜びや尊さを体得させる。
・様々な体験活動を通して，仲間と協力したり，仲良く助け合ったりする心や思いやりの心を育てる。
・野菜の栽培活動をする中で，見つけたり，考えたり，調べたりすることを通して，ものの見方や考え方を広げるとともに，食に対する感謝の念や命を大切にする心を深め，食を大切にする心を育てる。
・地域の方々と農業体験活動などさまざまな活動を通して「地域との交流」を図り，ふるさと御陵を思う気持ちを高める。

（２）活動の実際

①米作り体験と御陵っ子米の販売（５・６年）

臨時休業中のため，田植えは地域の方にお願いしたが，秋には，地域の方や保護者の指導・協力を得ながら，稲刈り体験ができ，農作業の苦労や工夫について学べた。少しでも昔の農業にふれたいということで，刈り取った稲を束にして稲架がけも行った。束にするのが難しく，手作業の大変さを感じていた。また，稲刈りの様子をケーブルテレビや町広報誌にも取り上げていただき，活動の様子を PR することができた。

また，収穫物である「御陵っ子米」の販売を御陵公民館祭りで行う計画をしていたが中止になり，どうするか６年生で話し合った結果，育友会行事のときに保護者に販売することになった。販売までの準備として，５・６年生が「御陵っ子米」のキャラクターを考え，米袋にキャラクターのシールを貼り，お客さんに喜んでもらえるように工夫した。当日は町長さんも来校しており，購入していただくことができた。

②学校林植樹体験（６年）

「コロナ禍ではあるが，自分たちも学校林について知りたい。学校林を守る活動に参加したい。」という児童の声から，今年度も七福産業振興会の協力を得て，学校林の頂上付近に「平安しだれ桜」５本を植樹した。学校から離れているところにある学校林の歴史も知ることができ，有意義な体験活動になった。

（３）特に工夫した事項

・３年間を見通し「地域を知る」「地域と共に活動する」「地域に発信する」という流れで取り組んできた。３年目の今年度は「地域に発信する」ということで，公民館祭りで取り組みについて発表することを計画していたが，コロナ禍のため中止となった。そんな時，「ふるさと学習ニュース」の話をいただき，６年生が作成したいと意欲を示してくれたので，それを発信の場に代えることができた。
・２学期以降の活動はボランティアを募り，コロナ禍ではあるが感染症対策を講じた上で，地域の方とふれ合う機会を設定できた。

（４）地域コーディネーターの活動概要

昨年度に引き続き，永平寺町子ども会育成連絡協議会会長の田中氏と，御陵地区公民館長であり七福産業振興会事務局長の森塚氏に就任していただいた。地域コーディネーターとしての活動は，以下の通りである。

・田畑や農業関係の方との調整役。田んぼの管理。
・米作りや野菜栽培を行う上での，学校や児童へのアドバイス。
・七福産業振興会や公民館祭り実行委員会（今年度は中止となった）との橋渡し。

（５）成果と課題

３年目の今年度は「地域に発信する」ということで，公民館祭りの展示コーナーやステージでの発表を計画していた。しかし，中止となったため，「ふるさと学習ニュース」を作成し，授業公開時に保護者に見てもらえるよう掲示した。公民館や地域の郵便局にも掲示をしていただいた。また，発信の場としてケーブルテレビ等を通して地域の方に活動の様子を伝えることができた。

３年間の取り組みの成果として，地域とのつながりが深まり，来年度以降も地域の方々に野菜や米作り，学校林での体験活動に協力いただけることになっている。今年度は，コロナ禍のため活動に制限があったので，来年度は計画した活動が実施できることを願っている。来年こそは，公民館祭りで，活動の様子を地域の方々に発表できるとよい。子ども達の活動が，地域を盛り上げることに一役買えるよう，取り組んでいきたい。

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール実施報告書

永平寺町志比小学校

１「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

①読み聞かせグループ「ひよどりブック」代表（１名）
②地域団体「愛菜グループ」代表（１名）
③地域団体「花谷城山会」代表（１名）
④志比幼児園長
⑤志比小学校ＰＴＡ会長
⑥校長　　⑦教頭　　⑧教務

※地域コーディネーター（１名）
「花谷城山会」会員

（２）協議会の開催計画

○開催回数　　２回
○開催日程　６月 11 日(木)
　　３月 ４日(木)
○協議内容
・ｽｸｰﾙﾌﾟﾗﾝと学校経営
・家庭や地域全体の教育
・地域学習
・子どもの安全
・学校評価について
・次年度に向けての方策
・ＰＴＡ活動について

（３）協議会における成果と課題

協議会委員の協力を得ながら、地域のボランティアやゲストティーチャーを活用して、地域にふれる学習を積極的に行った。「愛菜グループ」の方からは、地域の食文化である『葉っぱ寿司』の作り方を教わって、ふるさとの味を味わった。また、「花谷城山会」の方の協力を得ながら、城山をアピールすることで地域を活性化させる取り組みに児童が参加することができた。

協議会委員の方々には、行事等を参観して頂き、学校とは違う立場から、子どもの教育について様々な意見を頂くことができた。今後も、児童の実態を深く理解して頂きながら、地域の特色を生かした教育活動をさらに進めて行くことが課題である。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

現在、本校の児童数は１３３名である。地域の人口減少が進み、数年後には児童数が９０人程度となることが予想されている。大都市への人口の集中が進み、地方の過疎化が問題となっているが、志比小学校区でも人口の減少は深刻な問題である。こうした背景を受けて、小学校の教育活動の中に、地域を知る活動や地域の方々と共に行う活動を取り入れることで、地域への愛着を育むことが大切であると考えている。地域を誇りに思い、地域を愛する児童の育成を通して、地域の活性化に繋げることを目的として、本活動を実施する。

（２）活動の実際

①地域の歴史を学ぶ

５年生は、専門知識を有する外部講師を招き、当地域の豪族であった波多野氏と山城跡がある城山についてや、波多野氏と朝倉氏の関係などについての話を聞いた。当時、波多野氏は朝倉氏と主従関係にあり、城山の山城は外敵の動きを見張り、その進入を防ぐために必要なものだったことを学んだ。また、１２月には朝倉氏遺跡の見学も行い、これまでに学んだことの理解を深めた。

３年生は、波多野氏に招かれた道元禅師によって開かれた大本山永平寺を見学し、七堂伽藍の荘厳

さに触れるとともに、座禅体験等を通して禅の心についての理解を深めた。

②地域の名所作り　～城山登山を通じて～

本校では数年前より、校歌にも歌われている城山について学習している。児童は、何度も城山登山を行いながら城山の歴史や自然について学び、地域の名所として城山を活性化させる様々な取り組みを考えてきた。

今年度５年生は、城山の登山道に登山者を励ます看板を設置することにした。９月から制作を始め、完成後の１０月には、城山会の皆様の手助けを受けながら城山に設置した。

６年生は、城山に登山者が休憩できるベンチを設置することを考えた。ベンチの組み立ては城山会の皆様と一緒に行い、色塗りは児童が城山らしいデザインを考えてペンキで塗った。できあがったベンチは城山に設置し、登山者の憩いの場となっている。

（３）特に工夫した事項

・地域の方と十分に話し合い、児童の思いと地域の方の思いが重なるような活動となるように心がけた。児童のやってみたいという思いを大切にしながら、城山を活性化させるという一つの目標に向かって、地域の方と児童が協力して活動できるように計画、実施した。

・地域コーディネーターを中心に、花谷城山会や愛菜グループ等、各種団体と連携することで、組織としての継続的な協力体制を築くことができた。

（４）地域コーディネーターの活動概要

６月：活動計画の打合せ
　　城山についての学習会
７～８月：ベンチ作り協力
９月：ベンチの設置
１０月：城山への看板設置
２月：６年生の城山活性化プラン発表会への参加

（５）成果と課題

・地域の歴史を学ぶことで、永平寺町には価値ある歴史的、文化的遺産が多く存在することを知り、自分たちの暮らす地域を誇りに思う気持ちを育むことができた。

・児童が地域の方と一緒に楽しく活動することで、自分たちだけではできない活動を実現することができた。児童にとってはやりがいのある活動となり、児童の成長を確実に感じることができた。

・学校が、児童と地域とをつなぐ拠点となり、地域の方が学校という場所を身近に感じられるようになったと思う。児童にとっても地域の方と親しくなることで、学校以外の場でも声を掛け合い挨拶を交わすなど地域の住民である自覚が以前よりも増した。たくさんの地域の方が関わる学校、どんどん地域に出て行く学校、そして地域が今まで以上に活性化することを目標に、今後も活動を継続していく。

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

永平寺町　志比南小学校

１「家庭・地域･学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域･学校協議会」の構成

地域コーディネーター（計６名）
役場職員ＯＢ（１名）
志比南小学校ＰＴＡ代表（1 名）
民生委員代表（2 名）
見守り隊代表（1 名）
公民館長（1 名）

（２）協議会の内容

年３回開催
５月：本会の趣旨、活動方針の説明、協議
本校の教育方針、教育計画の説明
１１月：教育方針、教育計画についての経過報告
２月：学校評価の考察
今後の活動とその関わり方の検討
次年度の組織、活動の見直し

（２）協議における成果と課題

コロナ感染防止のため、例年のように来校して、授業や行事での児童の姿を実際に見ていただくことができなかった。しかし、そのような状況の中でも、５月は地区合同体育大会の実施のあり方や学校再開後のことについて相談をし、地域の同意を得ることができた。また１１月は、試行錯誤の学校生活や行事の様子を、学校便りやタブレット端末で見ていただいた。２月には、次年度の行事のあり方を相談することができた。今年度より、三密対策のため、児童クラブが学校に移転されることになった。また、公民館の役割も担うことになった。地域の交流の拠点として、今後も共に「家庭･地域・学校」の在り方について考え、行動していきたい。

２地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

地域の自然文化や、いろいろな人との温かいつながりを通して人間性豊かなたくましい子を育成したい。そこで、「地域に学び、地域とつながる南っ子」を活動推進のテーマとし、地域全体を学びの場とした活動を積極的に取り入れていきたい。そして、学んだことを地域に発信したり、地域に還元したりすることで、地域との連携を深め、自然あふれる町としての永平寺町に愛着を感じ、ふるさと南地区を大切に思う児童を育成することをねらいとする。

（２）活動の実際

①花いっぱいにしよう（環境委員会4～6年）

本校の花壇は、自動走行車両の道路沿いに、整備されている。環境委員会の児童を中心に土作りをし、種から育てている。育った苗は近くの幼児園に届けたり、保護者や児童にも、「地域を花いっぱいにしよう」と呼びかけ提供したりしている。

花壇のデザインは、全校児童に呼びかけ入賞作品を使っている。今年は、花壇コンクールは中止となったが、美しい花壇は登下校の児童や自動走行車に乗る人々を笑顔にした。

②サクラマスの魚卵育成と環境美化活動（4･5年生）

本校校舎横を流れる桜川は、初夏にはホタルが　飛び交い、秋にはサクラマスが遡上する自然豊かな河川である。しかし近年の河川工事の影響もあり、その美しい姿が見られなくなってきているのが現状である。

そこで、地域の自然環境に関心を持たせようと、サクラマスの卵を地域から提供していただき、学校内で孵化させ、稚魚になったところで放流する取り組みを継続している。放流の際には、「サクラマス遡上の会」のメンバーの方々の協力を得て、サクラマスの一生についての学習会も行った。また、今年度はこの事業を引き継ぐ４年生も総合学習の一環として河川美化運動に取り組み、「はっぴーすスマン」と一緒に、ゴミ拾いをした。

（３）特に工夫した事項

・これらの活動は、南っ子発表会で、下級生や保護者の前で発表したり、ケーブルテレービに取材を依頼し地域に発信したりした。自分たちの言葉で環境を守るために実際に活動し、感じたことを伝えることで、広く地域の方々にも知ってもらえるようにした。

・環境美化活動のゴミ拾いはコロナ感染症対策の中、三密を避けながらも「親密」を大切にしようと呼びかける全校児童対象の人権集会と合わせて、実施した。

・身近な環境からSDGｓへと世界が持続可能な社会になるようにと視野を広げるようにした。

（４）地域コーディネーターの活動概要

家庭地域学校協議会の委員の中には公民館館長や各団体で中心となって活動している方がおり、畑づくり・サクラマスの放流・七夕の笹飾りの準備・ホタルの飼育・サクラマスの魚卵提供などで地域人材の確保に協力をいただいた。

（５）地域コーディネーターの活動概要

地域の方々と一緒に取り組み、その成果を発信することで、より多く人に活動を理解していただくことができた。家庭･地域・学校協議会の時に「今年は、コロナ感染防止のため、学校に行く機会は減ってしまったが、例年以上にテレビや新聞に南小学校のことが取り上げられて、元気な様子が見られてうれしかった」という声を聞くことができた。

新しい学習指導要領の柱の一つである社会に開かれた教育課程の実現に向けて、地域に根ざした本校独自のカリキュラムの編成がみえてきた。さらに、校内の発表会を通して、それぞれの活動が次は自分たちの番だという引き継ぐ意識が芽生えていることも大きな成果といえる。

ただ、活動の継続については、地域の方々の専門的な知識や支援の手が入らないとできないものも多く、地域コーディネーターの方々を通してより多くの地域の方々に愛され協力を得られる学校となるように、本校の魅力を発信していく必要がある。

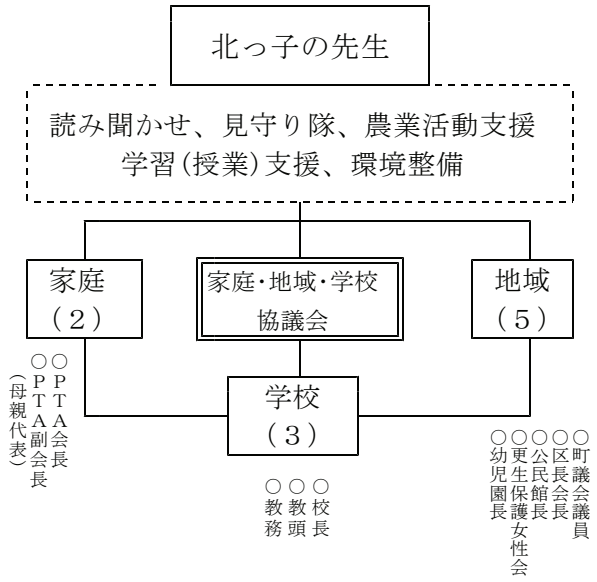
令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

志比北小学校

１「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

〈家庭・地域・学校協議会の構成〉メンバー 10名



（２）協議会の内容

第１回：令和２年６月
○組織の決定
○学校運営に関する説明
○「北っ子の先生」の活動の進め方
○「地域と進める体験推進事業」の説明

第２回：令和２年１１月
○児童の姿から
○学校教育活動の点検

第３回：令和２年３月
○学校教育活動の評価
○今年度の課題と来年度への方策

地域コーディネーター（６名）
・町議会議員　志比北振興連絡協議会会長
・志比北公民館長　浄法寺山山岳協会会長
・更生保護女性会員
・北地区区長会長
・志比北幼児園長
・志比北小学校ＰＴＡ会長

（２）協議会における成果と課題

・地域の方を「北っ子の先生」として招き、農業体験活動、読み聞かせ、校地内の環境整備、授業の支援など多岐にわたった。

・11月に行った「ふれあい集会」では、北っ子の先生（読み聞かせ部会）が、全校児童と保護者に、地域の民話『びんつけ地蔵物語』を読み聞かせ劇で披露したり、児童が感謝の手紙を渡したりなど、児童と地域の方の双方にとって有意義な交流の場となった。
・コロナ禍にあって、地域に開放する学校行事や活動は中止せざるを得ないこともあったが、学校便りやＰＴＡ広報紙を区長会の協力を得て地区の全戸に配布・回覧をしたり、学校HPを利用したりすることで、学校の教育活動を地域に知らせることができた。
・感染予防対策を徹底に苦慮したが、地域に開放する学校行事や活動内容や方法を工夫しながら、可能な限りの地域との交流を行うことができた。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

地域の豊かな物的・人的資源を生かした体験活動を多く取り入れ、これからの社会をたくましく生き抜く力を育む学校づくりに取り組む。

（２）活動の実際

①『われら志比北探検隊』（２・３学年）

６月に授業が開始され、２・３年生の校外学習で北地区の探検活動を行い地区の史跡や歴史に触れた。今年度は臨時休業や地域の方との交流が制限されていたこともあり、地域のゲストティーチャーを招いての活動はかなわなかったが、史跡の見学をさせていただいたり訪問先で質問に答えていただいたりといった交流を行った。

②「大豆の栽培」（３学年）

３年生は理科の学習の大豆の栽培と関わらせ、栽培～収穫～加工食品の学習の過程を、北っ子の先生に協力を得ながら進めた。そして大豆の栽培や加工食品についての学びをふれあい集会で発表したほか、３年生が栽培した大豆を打ち豆にし、参加者に配布した。

③『米づくりにチャレンジ』（４・５学年）

４・５年生は昔ながらの米作りに取り組み、気温や肥料をまく時期と生育の関係についてなど、わからないことを地域の北っ子の先生方に質問して疑問を解決した。カメムシやいもち病などについてもアドバイスをいただきながら対処し、無事に米を収穫することができた。

また、例年行ってきた若鮎グループの方々との葉っぱ寿司作り交流が、コロナ禍で今年度は行えなかったので、若鮎グループの方から、手作りのあずきでっちをいただき、全校で地元の味を味うことができた。

④『コサージュ作り～卒業に向けて～』（６学年）

卒業を迎える６年生に、卒業式で自分の胸に飾るコサージュ作りで、北っ子の先生と交流を行った。細かく丁寧な指導で、児童たちは自分が卒業式につけるコサージュを完成させることができた。

（３）地域コーディネーターの活動概要

・米作りや生き物など、交流する北っ子の先生の紹介をする。
・児童の地域においての探求活動を支援をする。
・北っ子の先生の読み聞かせ部会の中心となって、地域の史跡にかかわる民話を読み聞かせ劇に台本を仕上げ、ふれあい集会で発表した。

（４）特に工夫した事項

・ふれあい集会で発表するにあたって、それぞれの学年でよく話し合い、低学年や地域の方にも理解してもらえるような発表の仕方を自分たちで工夫した。
・新型コロナ感染症感染防止対策をとりながら、北っ子の先生方との交流の中で学びを得る機会を確保し、その成果や感謝の気持ちを伝えられるような場の持ち方を工夫した。

（５）成果と課題

本校は児童数36名という小規模校であるが、保護者や地域の方々の支援を受け、子どもたちには自分たちの学校や地域を愛する心が育ち、またコミュニケーション能力も高まっていると思われる。どの学年においても、地域コーディネーターと連絡を取り合って活動を計画し、地域と連携しながら学校教育活動をすすめていくことが定着している。作物の栽培や加工、地域の歴史などについて、今年度のようなコロナ禍にあっても、多く地域の方に多くの場面で協力していただいた。１年の学習の成果を発表する「ふれあい集会」では、どの学年も自分たちの１年間の学びとその成果を、地域やお世話になった北っ子の先生方に向けて堂々と発信していた。今後も地域と連携し、地域の願いと関わらせながらたくましい児童の育成に努めていきたい。

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

永平寺町上志比小学校

１　「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

①読み聞かせグループ「お話１．２．３」代表　（１名）
②上志比地区民生児童委員　（１名）
③上志比児童館指導員　（１名）
④上志比小学校ＰＴＡ会長
⑤上志比幼児園長
⑥校長　⑦教頭　⑧教務主任

※地域コーディネーター（２名）
学校田運営委員長、ＰＴＡ会長

（２）協議会の内容

第１回（７月）
本会の趣旨・スクールプラン・学校の概要・年間行事計画等についての説明と意見交換

第２回（２月）
学校評価の結果と分析
今年度の反省・次年度にむけて

（３）協議会における成果と課題

・今年度は学校行事に参加していただくことは難しかったが、協議会の構成委員の皆様が地域での児童や保護者に声かけや交流をしてくださっていた。
・登下校時の見守りや定期的な読み聞かせ活動等、児童に寄り添う支援を地域で多くしていただくことができた。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

・学校田での稲作体験活動では、将来を担う子ども達が、自分の目で見て、手で触れて、食べて、考えることを重視している。生命、食べ物の大切さを感じてもらうだけでなく田植えや稲刈り、農産物の販売体験などを通じて、地域の人との交流、産業としての農業を学ぶ機会を提供し、子ども達の社会的な成長を促すことを目的とする。さらにこれらの活動を通して、協力すること、大変なこともあきらめず最後まで成し遂げる「心の体験」と、地域の方から農業は販売に関する様々な智恵を教えてもらう「地域との交流」も図りたい。

（２）活動の実際

①「稲刈り体験」　５・６年生　９月
体験を通して、自然の恵みや農作業の工夫を地域の方や保護者から学び、収穫の喜びをともにした。

②「道の駅『禅の里』での販売体験」

５年生　１１月

収穫した米を、校区内の道の駅「禅の里」で販売した。事前に高学年が合同で収穫したお米を宣伝するチラシや米袋に貼るラベルを作り、袋詰めを行った。多くの方々に支えられて育ったお米一粒一粒を大切に思いながら、作業をすることができた。販売会場の道の駅では、会場設営から集客、販売と分担して活動を行った。ポスターやプレゼントつきのくじを準備するなど地域の方々と交流し、販売体験を行うことができた。

（３）地域コーディネーターの活動概要

・学校田運営委員会への参加
・人や道具の手配
・関係機関（九頭竜オーガニックファーム）との調整役
・ＰＴＡとの連絡・調整
・児童の米作りの世話や準備・指導、水田の水の管理

（４）特に工夫した事項

・今年度は、臨時休業期間があったため、田植えを地域の方にお願いした。自分たちの代わりに地域の方にお世話になったという意識が高まった。
・感染症拡大防止にかかり、様々な制約がある中、周りの方々の協力のおかげにより稲刈り体験や米販売体験は行うことができた。貴重な体験をさせてもらったという思いを持ち、お世話になった地域の方々への感謝の気持ちが高まった。
・今年度も米作りができたという達成感を味わうことができた。

（５）成果と課題

・ＰＴＡの組織の中に位置づけた「学校田運営委員会」が設置５年目となり、児童の活動をリードし、年間を通して活動を行うことができた。水田の水の管理は、委員が毎日交代で行い、今年度は、田植えも代行していただいた。
・委員の中の農業経験が豊富な委員が、学校田の状態に応じた水管理表の作成したり、害虫対策について会で助言するなど、自主的な活動が続いている。
・稲刈り体験は、平日に行った。密を避けるための策ではあったが、学校田運営委員のサポートの下、効率よく作業することができた。次年度以降は、計画時から平日の開催も選択肢に入れて日程調整を行いたい。
・「九頭竜オーガニックファーム」「道の駅『禅の里』」といった、地域の各種団体の方々が体験活動の準備や世話を快く引き受けてくださっている。今年度も特別な配慮をしていただきながら、協力していただくことができた。地域の方とのつながりの重要性を感じた１年であった。

（様式３）

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

松岡中学校

１「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

地域・学校協議会委員
- □町公民館長　（１）
- □学識経験者　（１）
- □元ＰＴＡ役員（３）
- □現ＰＴＡ役員（１）

計６名

＊松岡小学校区３名
吉野小学校区１名
御陵小学校区２名
□本校職員（校長・教頭・教務）　計３名
合計　９名

地域コーディネーター（２名）
公民館長、同窓会会長

（２）協議会の内容

第１回８月６日(木)
- ・令和２年度の教育計画全般について
- ・生徒の状況について
- ・情報交換、その他

第２回３月４日(木)
- ・年間の学校の様子について
- ・新年度の見通しについて
- ・学校評価について
- ・一年間の反省、その他

（３）協議会における成果と課題

学校評価や学校の実情を詳しくお伝えし、ご意見をいただいた。新型コロナ感染症対策につて、学校の新しい生活様式についてご理解をいただいた。学校訪問等は、今年度は避けていただき、その分ホームページで生徒の様子を配信した。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

本校は、福井平野の東部に位置して、福井県一の大河九頭竜川をまたぐ永平寺町の西端にある学校である。

本校の裏山には、「越（こし）」という古代国家の王族が葬られたものと言われる大小様々な古墳群がある。また、越前松岡藩の城下町として栄えた歴史もある。それらの伝説や名所旧跡をもとに旧松岡町商工会が制作した「まつおか発見伝歌留多」は、故郷の良さを子どもたちに伝えるものとなっている。本校では、その歌留多に記されている場所を実際に回って実物に接することにより、ふるさとに対する関心をより深め、愛する心を育むことを目的に、ウォークラリー大会を開催している。

また、キャリア教育の一環として、職業観を育成することを目的に、本校を卒業して３０年後の今、現在第一線で活躍している本校卒業生の方々を招いて、授業（講演）をしてもらう「お帰り松中生」を行っている。

（２）活動の実際

①松岡発見伝ウォークラリー大会（１～３年生）

事前活動として、１年生は「まつおか発見伝」歌留多大会を行い、町内の名所・旧跡の位置やいわれについて事前に学習する。次に全学年とも１学級を６グループに編成し、指定された町内の名所旧跡の中から、時間内に回れるﾁｪｯｸﾎﾟｲﾝﾄを選び、班ごとに計画を立てる。当日は学年ごと一斉にスタートし、計画に沿ってﾁｪｯｸﾎﾟｲﾝﾄを回る。競技は、距離の遠近の得点とクイズの得点を合計し、全学級対抗

（様式３）

で競う。今年はＰＴＡの役員方に給水所は設けられなかった。日ごろからなじみの深い地区にも、違った一面があることを知り、改めて郷土の魅力を感じていたようである。

今年は新コロナ感染症対策の中で例年5月が10月開催の大会となったが、生徒の意欲は衰えるどころか、かえって涼しいコンディションの中でより活発に活動し、ＰＴＡや地域の方々と元気なあいさつを交わしたり、いわれを教えてもらったり、一緒に写真を撮ったりと幅広い交流を図ることができた。

②おかえり松中生～教えて先輩～（１～３年生）

本校の同窓会が中心となり、卒業後３０年目の先輩１４人が、現在の職業のやりがいやその職業を志した理由について生徒たちに授業を行う。文科省のキャリアや技術者、コンビニのオーナーなど、様々な職種の内情を、講話や体験を通して生徒たちに分かりやすく伝えていた。生徒たちは、大先輩の話に熱心に耳を傾け、今後の進路に対する思いと、自分なりの職業観を構築していた。

（３）地域コーディネーターの活動概要

・ウォークラリー大会の運営参加とＰＲ協力
・「おかえり松中生」の企画･運営参加
・「おかえり松中生」の講師選定の協力と連絡調整

（４）特に工夫した事項

・　松岡発見伝ｳｫｰｸﾗﾘｰ大会においては、歌留多の名所から毎年違ったﾎﾟｲﾝﾄを設定し、３年間で全てのﾎﾟｲﾝﾄを巡れるようにしている。クイズの設問には、教師以外にPTAにも参加してもらい、地元の方ならではの問題を出題した。当日の本部運営は生徒会執行部と体調不良の生徒が当たり、自主運営を見守った。
・　おかえり松中生“教えて先輩”においては、進路選択が間近に迫っている３年生より講座を選んだり、運営はそのとき学校の中心となっている２年生に任せたりするなど、学年の状況を考慮した役割分担を行った。授業後の生徒の感想は全部コピーして講師の先生にお渡しして、多くの好評を得た。

（５）成果と課題

今年で「ウォークラリー」は１８回、「おかえり松中生」は１７回を迎える。この間に２つの行事は、生徒にも保護者にもOBにもかけがえのない行事となった。

ウォークラリー大会は、もともとマラソン大会の代わりの体力作りと地域の理解を深めることを目的に始まったものだが、地域への広報やPTAの参加によって、地域の方々と触れあいが深まった。今後もこの行事を継続し、「地域に学び・地域に元気を発信する」中学校でありたい。毎年５月に学級づくりとしても位置付けられている行事だがコロナの関係できず、中止にするか悩んだが、伝統的な大切な行事もあり、例年のようなPTAの方に協力してもらうことはできなかったが、実施できたことの意義は大きいと感じた。

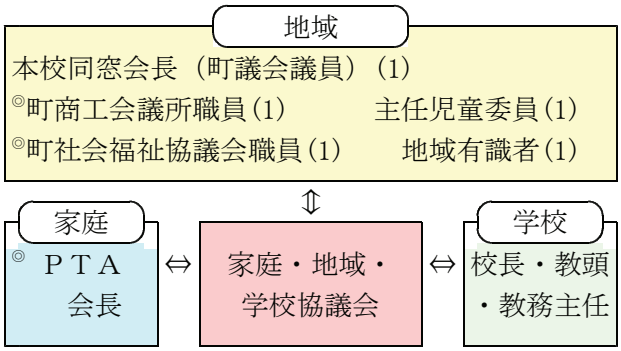
卒業後３０年のOBを講師として招いて行う進路学習は、講師の方々にも生徒にも深く心に焼き付くものが多いと感じる。生徒は現在社会の第一線で働く方々の話で、“天職”というものを意識できるし、講師の方々は、「授業」という形で後輩に話ができるのは、何より嬉しい事のようである。最近では次の担当学年に「とても良いぞ」と伝えてくださり、日程をやり繰りして参加して下さる方もいらっしゃると聞いている。先輩と後輩の絆の深化と正しい職業観育成に大きな効果があるこの行事を、今後もますます発展させていきたい。

令和２年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

永平寺町永平寺中学校

１「家庭・地域・学校協議会」の設置と運営

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成



◎：地域コーディネーター（３名）

（２）協議会の内容

○開催回数　３回

○開催日程　令和２年８月５日
令和２年11月19日
令和３年２月18日

○協議内容
- 家庭･地域･学校協議会の趣旨
- 学校評価の実施と活用
- 学校開放日の実施と活用
- 地域の人材活用と連携

（３）協議会における成果と課題

協議会では、日頃の教育活動の様子や学校開放日の様子、学校評価の結果を、主に学校だよりをもとに説明した。臨時休業の際の対応および学校再開後の教育活動については、困難な状況の中、適切であるとの意見をいただいた。一方、新型コロナウイルス感染症への対応により、地域での活動を十分に進めることができなかったため、今後は、感染症との共存を図りながら内容や方法を工夫して実施していくことを確認した。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

当初は、地域活動の企画運営の中心となる人材育成のために、各地区で行われる行事やボランティア活動に積極的に参加し、その様子を地域の方々に発信する計画であった。しかし、感染症への対応として、校内でのふるさと探究学習に重点を置くこととし、地域の現状や課題についての理解を深め、地域との距離を近づけられるような活動を進めることとした。

（２）活動の実際

①永平寺町について（第１学年）

町長や専門家を講師に招いたり現地を訪問したりして、地域防災・観光振興・歴史・文化等の現状や課題を知り、グループごとに発表。さらに、グループ協議を経て提言をまとめた。

②福井県の特長と課題について（第２学年）

ふるさと福井の抱える今日的な課題について理解を深め、地元永平寺町とも比較し、解決に導くための方策を発表。

③本校の伝統について（第３学年）

永平寺での宿泊学習や無言清掃など、学校の伝統を継承する意義を寸劇にして発表。

④地域でのボランティア活動

地域の方々や地域コーディネーター（社会福祉協議会）の協力を得て、除雪作業を実施。

一部地域では、ＰＴＡの協力を得て、通学路の草刈りや清掃を実施。

（３）特に工夫した事項

調査や報告書作成・発表には、一人一台のタブレット端末を活用した。また、文化祭や学校開放日を利用し、学習の成果を保護者や一般の方に直接伝える場を確保した。また、活動の様子を学校だよりや学年だよりにまとめ、ホームページ上で公開するとともに、活動報告をリーフレットにまとめ、校区の全家庭に配布した。

（４）地域コーディネーターの活動概要

地域コーディネーターに、ふるさと探究学習の講師や、講師の紹介を依頼した。ボランティア活動については、地域コーディネーター（社会福祉協議会）やＰＴＡに活動の様子の見守りと安全対策を依頼した。

（５）成果と課題

新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けながらも、身近な地域についてじっくりと学習活動を進めることができたこと、校区内の方々や関係機関の方々に講師として協力を得ることができたことが本年度の大きな成果である。これまでも、身近な地域と他の地域との比較を通して町づくりや歴史・文化等について学んできたが、校区の状況についての学習を深めることで、他の地域に目を向けたときに新たな視点をもつことができるものと期待している。

一方、これまでの３年間、生徒が地域の活動に参加しやすいよう、地域の方々の協力を得てきたが、感染症の影響は極めて大きく、あらゆる場面で制限があった。今後は、校区という生徒にとって最も身近な地域での活動を中心に活動を進め、自らが地域活動の企画・提案・運営の担い手として貢献できるよう、地域コーディネーターとも協議しながら活動を進めていきたい。

令和２年度　福井型コミュニティー・スクール　実施報告書

上志比中学校

１　「家庭･地域･学校協議会」の設置と運営

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

教育委員会（設置要綱）

家庭・地域・学校協議会

- 家　庭
- 地　域
- 学　校

学識経験者
壮年集団連絡協議会代表
中学校ＰＴＡ会長
公民館館長
人権擁護委員
地区代表
校長
教頭
教務

※　地域コーディネーター（２名）
家庭地域学校協議会委員長・ＰＴＡ会長

（２）協議会の開催内容

・第１回　中止
　今年度はコロナ感染症対策のため協議会を実施せず、スクールプランや学校要覧、年間行事計画等を協議会委員の方の自宅に持参し、今年度の学校運営方針等について説明した。
　「地域と進める体験推進事業」について、説明と協力を依頼した。

・第２回　９月７日（土）８日（日）
　体育祭や文化祭における生徒の様子や学校施設の状況を視察する。

・第３回　２月２７日（木）
　学校評価の集計結果報告と次年度に向けての取り組みについて協議する。

・通年
　学校開放日には、生徒の視察を行う。

（３）協議会における成果と課題

　今年度はコロナ感染症の影響で、協議会委員の方々に来校していただくことはほとんどできなかった。しかし、学校祭の参観や、面接練習の講師として来ていただいた数少ない機会の中で、委員の皆様には理解と適切な指導ご助言をいただいている。
　委員の方々も長い方は１０年近くになる。本校は地域外の職員がほとんどのため、今後委員の交代となった時の人材発掘がなかなか難しい。担い手を探すことが、今後の課題と考える。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

　上志比地区には、吉峰寺をはじめとする史跡や名勝が数多く存在する。中部縦貫自動車道の建設によりその歴史あるものが埋もれてしまう可能性があるため、平成 14 年度に「ふるさと探求」という冊子が発刊された。発刊より 15 年余、その冊子が手元にある家庭も少なくなり、地区に残る史跡や名勝についての興味・関心も薄れ、中学生に限れば、身近にあるその存在すら知らない。この事業を通して、地元「上志比」の歴史や文化について理解を進めるとともに、ひいては「ふるさと上志比」を愛する生徒を育てたい。

（２）活動の実際

①吉峰寺へ奉仕活動と座禅体験　　中止
　今年度は、コロナ感染症の影響で中止とした。

②史跡巡り（事前学習 11 月 17 日 2 限目・史跡巡り 3・4 限目）

永平寺町内には松岡古墳群をはじめ、大本山永平寺や吉峰寺等、全国的にも名の知れた歴史的遺産のある。事前学習では、その中でも旧上志比村の成り立ちや史跡についていろいろ話を聞いた。生徒は中部縦貫自動車道のことは身近に感じているが、その建設の裏で、歴史あるものが埋もれてしまう可能性があったということを知り、驚いていたようである。

昨年、先輩方が作った冊子を見て、自分たちが探索する地域を確認し、よく見慣れた場所にもまだまだ知らない歴史がいろいろあることを知った。探査地域に住んでいる生徒の中には、知っている史跡もあったようであるが、詳しいことは知らず、現地調査に期待を膨らませていた。

その後、史跡巡りを行った。当日は、地域の語り部の２人が生徒全員と行動を共にして、あちこち見たり聞いたりした。

③資料集づくり（１２月）

上志比中学校版「ふるさと探求」の制作のため、昨年同様史跡巡りで分かったことをまとめ発表した内容をデータ化して残した。生徒たちの見てきたものの写真と、現在ある冊子の内容を分かりやすく読み替えて右のようにデータ化した。

（３）　地域コーディネーターについて

①地域コーディネーター　２名

・家庭地域学校協議会委員長　　多田省吾さん

②地域コーディネーターの活動概要

史跡巡りにおいて、計画の段階から参加いただいた、地域の語り部の多田美千子さんと鈴木真人さん、西分校（探査対象）卒業生の奥出唯一さんの３人と学校とを繋ぐ役割をしていただいた。

（４）特に工夫した事項

・直前に探査地域の歴史を聞き、新鮮な興味を持ったまま体験活動に取り組めるように計画した。

・地域の語り部の方には、それぞれの知見から話をしてもらえるように、史跡めぐりコースを考えた。

３　成果と課題

生徒たちは、とても意欲的に探索に取り組み、地域の知られざる歴史と発展している今を知ることができた。この活動は３年間、毎年１年生が取り組み今年が３年目である。上志比中学校版「ふるさと探求」が完成し、一つの財産として意義のあるものになった。

ただ、上志比地区を３つに分けて毎年 1 エリアずつ探求したため、各学年とも、活動をした１年のエリアのことしかわからない。完成した冊子を使って、他地域のことを学ぶ計画であったが、コロナ感染症の影響もあり、その時間を作り出すことができなかった。来年度の教育課程の中では、各学年がお互いに調査内容を読み合い、地域への理解と造形を深める時間を確保していかなければと思う。

永平寺町学校のあり方検討委員会
第６回委員会意見　　Ｒ３.11.22
永平寺町議会

追加　２０Ｐ　下から５行目
県内外の事例からは、学校の再編によって
⇩
学校の再編、地域とともにある学校づくりによって

確認　２０Ｐ　１１行目
学校がその目的を達成するためには、保護者・地域住民等の支えが必要であり、共に学校運営に関わってく「地域とともにある学校づくり」が一層、求められてきています。　とある。
行われている「家庭・地域・学校協議会」の位置付けの補足説明が必要。

修正　１８ｐ　２４行目
平成３１年から、すべての学年が１０名未満となります。
⇩
１０名未満となっています。

－　以　上　－

永平寺町学校のあり方検討委員会
第６回委員会意見　　R３.11.22

志比北振興連絡協議会　川崎直文

修正　１８ｐ～１９ｐ
章立てを以下に修正
１８ｐ　１行目から
○小学校
〈松岡小学校〉
・・・
○中学校
〈松岡中学校〉
・・・
②　提言
○小学校
志比北小学校は
・・・
○中学校
上志比中学校の生徒は
・・・

修正　２１ｐ
章立てを以下に修正
③ 学校と地域をつなぐコーディネーターの配置
⇩
③「地域とともにある学校づくり」の運営・
・・・

・地域の人々、保護者の支援組織
・・・

・コーディネーターの配置
・・・

・支援する人材の育成
・・・